

平成 1 7 年 度

研 究 集 録

— 川越市教育委員会委嘱学校研究 —

川 越 市 教 育 委 員 会

目 次

(学校名)	(研究主題)	(ページ)
【2年次】		
芳野小学校	仲間と豊かに関わりながら主体的に活動する児童の育成	1
中央小学校	子ども自らが、進んで伝え合おうとする力の育成	5
武蔵野小学校	「生きる力」を育てる算数の学習指導 ～「確かな学力の向上」を目指した指導法の工夫改善を通して～	9
新宿小学校	互いに認め合い、よりよい人間関係を築く子の育成 ～おりあいをつける話し合い活動を通して～	13
南古谷小学校	一人一人を大切にする授業の創造 ～「算数科」の授業を通して～	17
霞ヶ関北小学校	学びのよさを味わえる子どもの育成 ～指導方法の工夫・改善を目指して～	21
上戸小学校	自ら課題を見つけ、主体的に解決する子の育成 ～指導方法の工夫と改善を通して～	25
山田中学校	「各教科等の学習指導に関すること」 ～生徒一人一人に確かな力を身に付けさせる学習指導法の研究～	29
【1年次】		
名細小学校	一人一人の教育的ニーズに応じた学習内容・指導法の工夫	33
古谷小学校	生き生きと自ら取り組む児童の育成 ～算数科の指導を通して、基礎学力の確実な定着を目指す～	37
古谷東小学校	未来を手にする生きる力と自立心を身に付けた児童の育成 ～確かな学力を伸ばす学習指導法の工夫改善を中心に～	41
高階小学校	「わかる喜び」「できる喜び」を味わわせる学習指導法の工夫改善	45

あいさつ

川越市教育委員会教育長 山浦秀男

この度、平成17年度川越市教育委員会委嘱の各学校研究が、大きな成果を上げ、「研究集録」として刊行されることになりました。それぞれの研究主題に沿い、学校をあげて真摯に研究に取り組まれた姿勢に対し、心から敬意と謝意を表すものであります。

平成17年10月、中央教育審議会は「新しい時代の義務教育を創造する」(答申)の中で、「我々の願いは、子どもたちがよく学びよく遊び、心身ともに健やかに育つことである。そのために、質の高い教師が教える学校、生き生きと活気あふれる学校を実現したい。」と、義務教育のあるべき姿を示しています。

本市におきましても、教育行政の基本方針である「次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成」に向け、これまで以上に教育活動の充実に取り組んでまいりました。

本年度、各研究委嘱校では、各教科、総合的な学習の時間、特別活動、生徒指導、特別支援教育について研究を推進していただきました。特に、研究2年目を迎えた8校につきましては、各学校の特色を生かした実践の成果について発表をされ、生きる力の育成に向け、多くの示唆を与えてくださいました。いずれの学校におかれましても、先生方が教師としての力量をさらに高め、生き生きと活気あふれる学校づくりを推進していただいております。

市内各校におかれましては、ここに紹介された学校研究の成果を、平成18年度の自校の指導計画の見直しや指導方法の工夫改善に積極的に生かすことを期待しております。

結びに、委嘱研究に携わってこられた各学校及び関係の先生方のご尽力と、ご指導くださいました関係各位のご厚意に対し、改めて御礼申し上げ、あいさつといたします。

「仲間と豊かに関わりながら 主体的に活動する児童の育成」

川越市立芳野小学校

研究のポイント

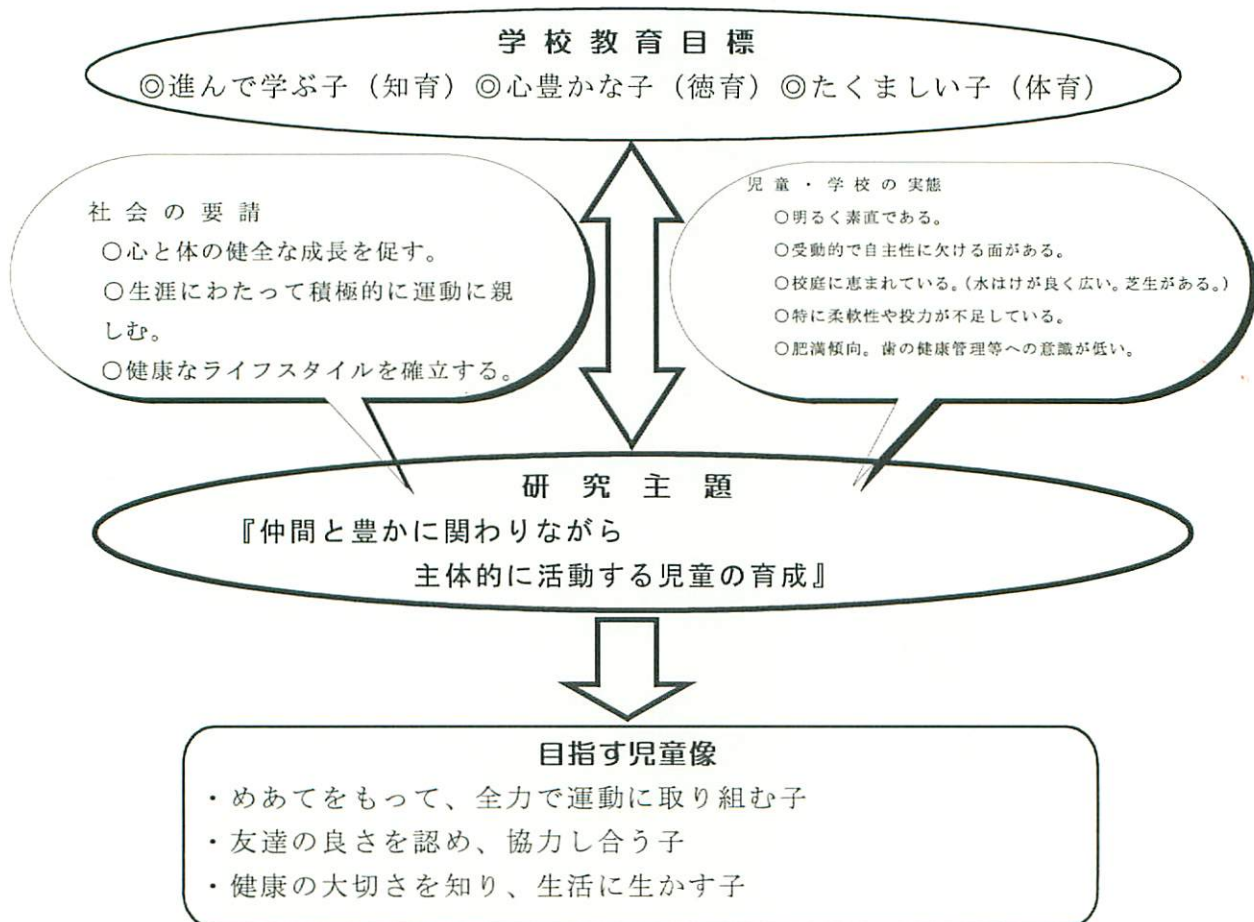
- 心と体を一体としてとらえ、児童一人一人を伸ばしながら、豊かな関わり合いが持てる指導法を工夫する。
- 児童の願いや思いを生かしつつ、仲間と豊かに関わり合える活動を計画的、継続的に実施するとともに、児童が活動したくなるような環境整備を進めていく。
- 児童が自ら生活行動を見直すような保健指導・保健学習を工夫する。

1 研究の概要

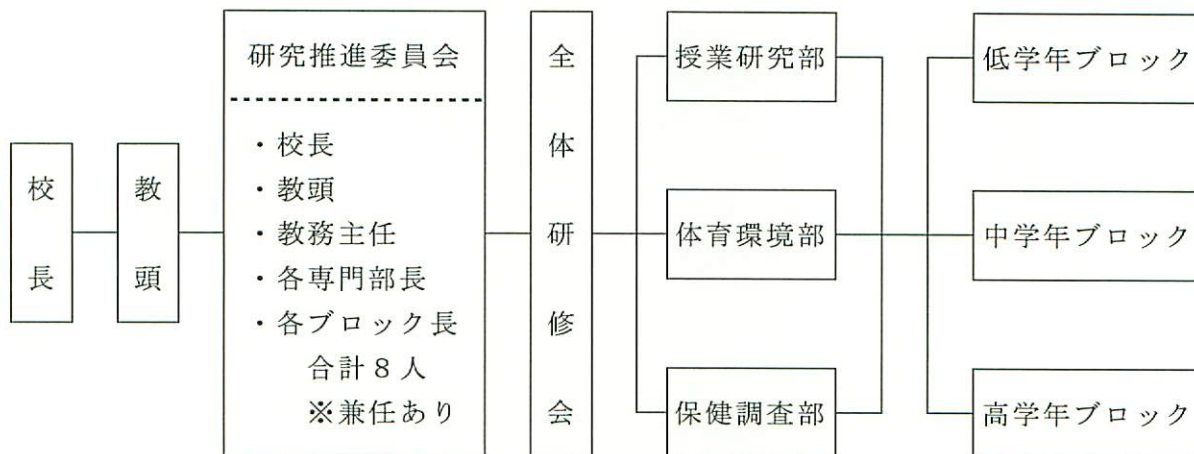
(1) 研究のねらい

- ①進んで運動や遊びに取り組む児童を育てる。
- ②進んで健康の保持増進に取り組む児童を育てる。

(2) 研究主題と主題設定の理由



(3) 研究組織

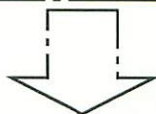


2 研究の内容

(1) 授業研究部の取り組み

■ 研究の仮説

心と体を一体としてとらえ、児童一人一人を伸ばしながら、豊かな関わりが持てる指導法を工夫すれば、進んで運動に取り組む児童が育つであろう。



- 『芳野小体育授業の進め方』を作成し、全教師が共通理解・共通行動のもとに、指導に当たれるようにした。
- 年間指導計画を見直し、見やすく活用しやすい工夫をした。
- 『器械運動の学習を効果的に指導するための8ヶ条』をまとめた。
- 芳野小体育科指導案作成のためのCDを配布し、指導案を作成する一助とした。
- 体育実技伝達講習会を行い、指導内容を深めるように努めた。
- 授業研究会を計画的に行い、活発な意見交換を行った。



芳野小体育授業の進め方



6年 体ほぐし



1年 リレー遊び



すくすくプログラムを準備運動に



4年 ハンドボール

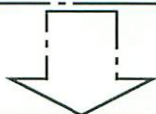


6年 フラッグフットボール

(2) 体育環境部の取り組み

■ 研究の仮説

児童の願いや思いを生かしつつ、仲間と豊かに関わり合える活動を計画的、継続的に実施するとともに、児童が活動したくなるような環境整備を進めていけば、進んで運動や遊びに取り組む児童が育つであろう。

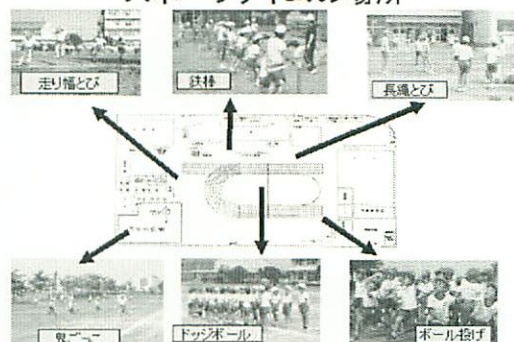


- おはようタイムを見直し、実施した。
- スポーツタイムを新設し、実施した。
- ウキウキタイム(拡大昼休み)を新設し、実施した。
(チャレンジ・マイ・ギネスの実施)
- 体育的環境の整備をした。
- 自作遊具の製作や教具の修理をした。
- 体力づくりカードを作成し、意欲化を図った。

【スポーツタイム】

- ・毎週金曜日の朝 15 分間
- ・種目は 6 種類
 - ①鬼ごっこ (すくすくプログラム)
 - ②鉄棒
 - ③ボール投げ
 - ④走り幅跳び
 - ⑤ドッジボール
 - ⑥長縄跳び
- ・2 週間ごとに、学年別にローテーション

スポーツタイムの場所

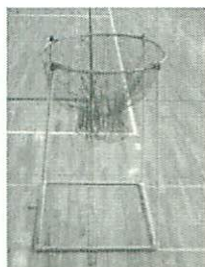
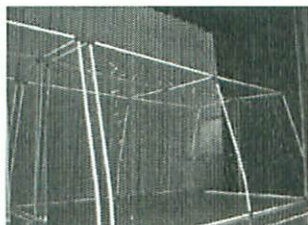


【ウキウキタイムとチャレンジ・マイ・ギネス】

- ・毎週木曜日は、昼休みを 35 分間に拡大して、外遊びを奨励している。(ウキウキタイム)
- ・遊びをより活性化するため、個人で得意な運動遊びを選び、記録に挑戦する。(チャレンジ・マイ・ギネス)
- ・チャレンジ・マイ・ギネスは、毎月第 1 回目のウキウキタイムの際、記録会として行い、掲示する。



【自作教具等】



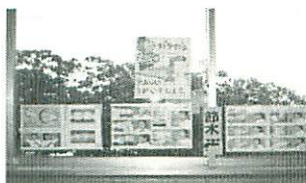
(3) 保健調査部の取り組み

■ 研究の仮説

健康・安全についての理解・実践を通して、児童の生活行動の課題を明確にしく保健指導・保健学習を工夫すれば、進んで健康の保持増進に取り組む児童が育つであろう。



- 生活と運動に関するアンケート調査を実施し、生活の見直しを図った。
- 学校・学級における保健指導の充実を図った。
(校医・歯科衛生士・学校栄養士等と連携)
- 健康診断結果の活用と健康への意識化を図った。
- 肥満傾向児童への指導をした。
- 学校保健委員会の実施による保護者への啓発を図った。



<本校の健康課題> むし歯罹患率の改善をはかる



歯みがき標語に取り組みました



4 研究の成果と課題

- 「芳野小体育授業の進め方」を作成したことにより、職員が共通理解・共通行動のもと、児童の指導にあたれるようになった。
- 「すくすくプログラム」の活用により、子どもの体育的基礎感覚を養う遊びや運動に対する興味関心が高まった。
- 学習の約束として声の掛け合い・見合いをさせるように努めた結果、人間関係がよくなった。
- 業前・業間運動の工夫により、運動に親しむ児童が増えた。
- ◎2年間の研究の結果、児童の体力に向上が見られた。
 - ・新体力テストの標準値への到達度は、1年次に比べ、2年次の方が上がった。
- 新体力テストのデータを比較・考察した結果、研究の成果が表れてきたものと、今後、重点的に指導していく必要性を感じるものが明確になってきた。
- 二年間の研究の後も、研究成果を生かした授業展開ができるよう、職員で努力していきたい。
- 年間指導計画に沿った授業展開をし、児童の実態と照らして更に内容の改善を図っていきたい。
- 体力テストで伸び悩んでいる種目を高めるための補助的な教具の工夫や環境整備を進めていきたい。
- 今後も学校の教育活動だけでなく、家庭や地域全体で体力づくりに取り組んでいけるよう、働きかけていきたい。

「子ども自らが、進んで伝え合おうとする力の育成」

～英語活動を通して～

川越市立中央小学校

研究のポイント

- 発達段階に応じた系統性を明らかにし、それに基づいた授業実践を行うことにより、年間指導計画の改善・充実を図る。
- 授業の中に、歌・チャンツ・ゲーム等を積極的に取り入れ、その在り方を明らかにすることにより、英語活動の指導過程について共通理解を図る。
- 学年内、AET、保護者ボランティア等との関わり方や教材教具・施設設備の見直しを行うことで、英語活動にふさわしい環境整備を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校では、「心豊かな児童の育成」を目指して地域と一体となって教育活動を進めている。「豊かな心は様々な人やものとの関わり（コミュニケーション）の中で育まれるもの」という信念のもと、英語活動を窓口に、伝え合おうとする力の育成を目指す。

特に、次の3点をねらいとして設定する。

- ① 発達段階に応じた学習内容を明確にし、年間指導計画の改善を図る。
- ② 仮説に基づいた授業実践を通して、英語活動の授業の在り方を明らかにする。
- ③ 英語活動という視点から、指導体制、学習環境、教育課程等の見直しを図る。

(2) 研究主題設定理由

① 社会的背景から

「小学校学習指導要領解説 総則編」より（平成11年5月）

- ・国際理解に関する学習の一環としての外国語会話
- ・小学校段階にふさわしい体験的な活動

「英語指導法等改善の推進に関する懇談会」最終報告より（平成13年1月）

- ・英語によるコミュニケーション能力の育成
- ・小学校段階にふさわしい体験的な学習を通じて英語の面白さが強調

② 学校教育目標から

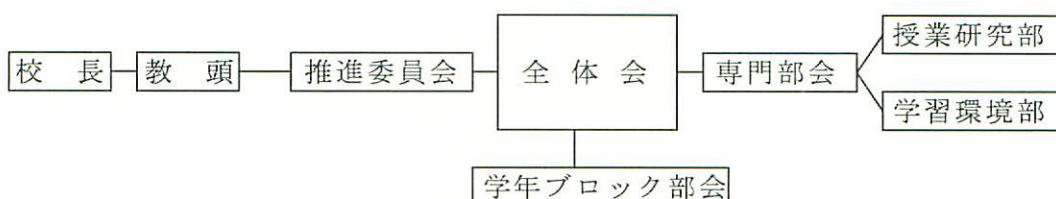
「心豊かな児童の育成 なかよく かしこく たくましく」

本校では「豊かな心」の育成を目指して様々な交流活動を進めている。特に、英語活動を窓口に、友だち、教師、AET、外国人、地域の人等との多様なコミュニケーションを通して、学力はもとより人間としてバランスのとれた児童の育成を目指している。

③ 児童の実態から

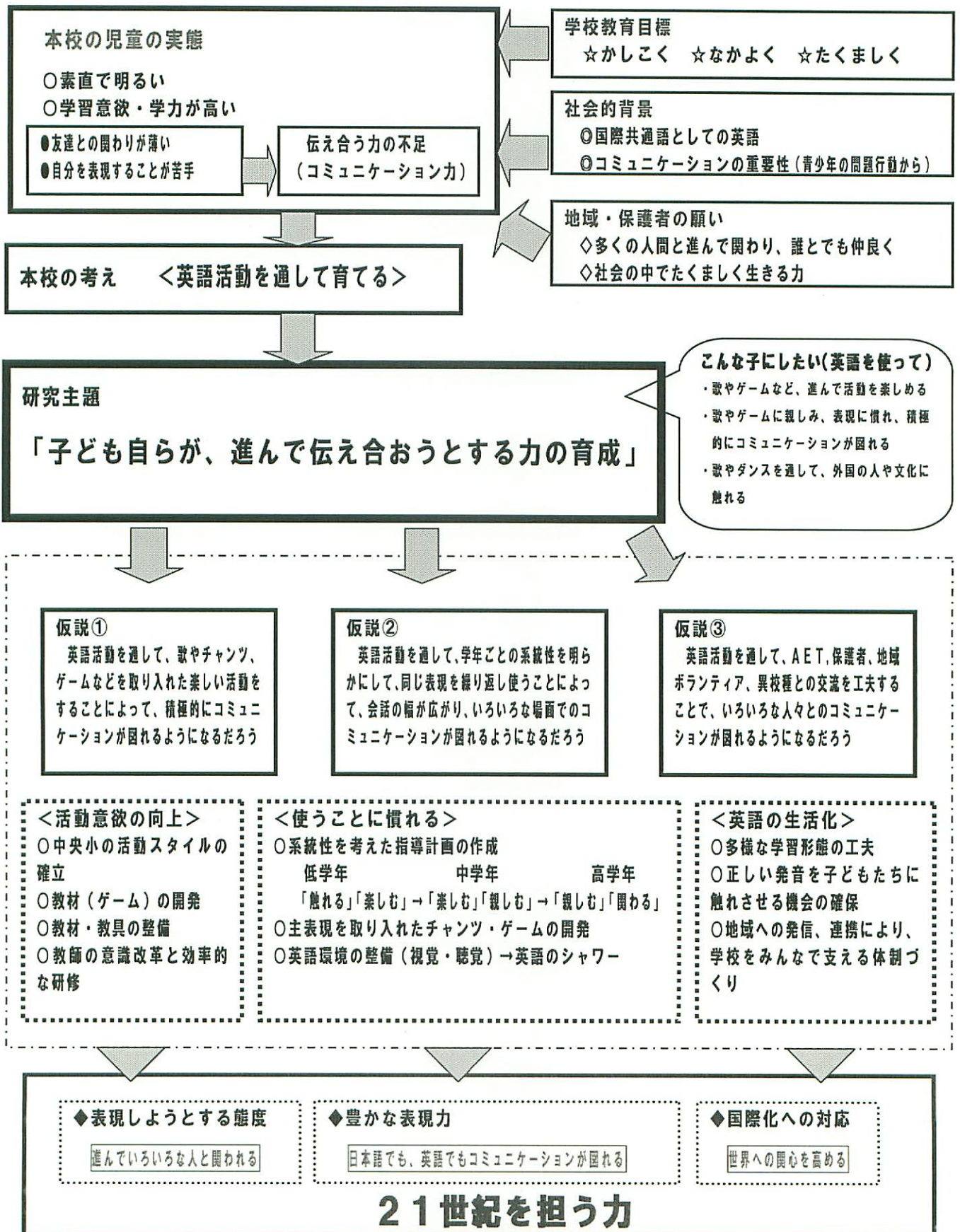
本校の児童は、読み書き、計算等の基礎的な学力は高い。しかし、多くの友だちと進んで関わろうとしたり、外国人・高齢者・障害者等と関わろうとすることが課題である。様々な人と関わりを自ら深めようとする児童の育成を図りたい。

(3) 研究組織



2 研究内容

(1) 研究構想図



(2) 専門部活動

① 授業研究部

〈ねらい〉『児童が楽しく取り組める英語活動の展開』

〈活動内容〉☆児童が進んで取り組める指導計画の作成（系統性）

☆児童が楽しく活動できる指導過程の工夫（歌、チャンツ、ゲーム）

☆児童が色々な人と関われる学習形態の工夫（ゲストティーチャー）



☆ 同じ表現を2学年で繰り返し行う。

英語活動年間指導計画系統表

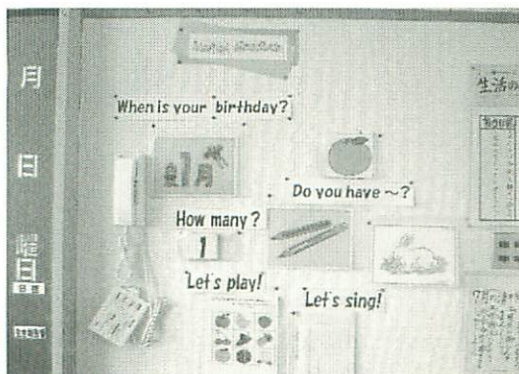
時期	学習内容	表現・言葉		
		低学年・花の子	中学年	高学年
4月	A E T の紹介	<ul style="list-style-type: none"> • Good morning. (afternoon, night) ○ How are you? 	<ul style="list-style-type: none"> • Hello, my name is ... ○ What's your name? 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Where are you from?
(2)	自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> • Fine, thank you. • And you? • Fine, too. I'm Akira. 	<ul style="list-style-type: none"> • My name is ... • Nice to meet you. • Nice to meet you, too. 	<ul style="list-style-type: none"> • I'm from Canada. (America, France,) • Nice to meet you. • Nice to meet you, too.

② 学習環境部

〈ねらい〉『児童に英語のシャワーを浴びせる学習環境の整備』

〈活動内容〉☆英語活動に意欲的に取り組める環境の整備（英語コーナー、ボード等）

☆教材教具の工夫・開発（Classroom English シート、朝の会カード等）



3 実践事例（第5学年 英語活動指導案 題材名『Do you like～?』）
本時の学習指導

学習活動	指導者とのかかわり	
	T1	T2(ボランティア等)
1. 始めのあいさつをする。	☆Hello.	☆Hello.
2. 「Seven steps」を歌う。	☆How are you? ☆Let's sing "Seven steps". ・元気に歌い、英語のリズムに慣れさせる。	☆How are you? ・児童とともに元気に歌う。
3. Yes/No jump game をする。	☆Let's play "Yes/No jump" game. ・ゲームの説明をする。	・児童に "Do you like ~?" と聞かれたら、 "Yes,I do." か "No,I don't." で答える。
4. 動物と食べ物の言い方に慣れる。 ・隠れた動物を当てる。 (Open the door) ・動物の好物を当てる。	・動物とその動物の好物を当てながら、言い方を覚えられるようにする。	☆Repeat after me
5. Missing card game をする。	☆Let's play "Missing card" game. ・ゲームの説明をする。	・児童に "Do you like ~?" と聞かれたら、 "Yes,I do." か "No,I don't." で答える。
6. 「Do you like～?」ゲームをする。	☆Let's play "Do you like～?" game. ・ゲームの説明をする。	・児童とともに活動し、必要に応じて支援する。
7. 「Good by to you」を歌う。	・児童とともに歌う。	・児童とともに歌う。
8. 終わりのあいさつをする。	・本時の活動をほめ、次時の意欲付けをする。	

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 〈児童〉○英語活動を楽しみにし、意欲的に英語で表現しようとする姿が見られた。
○英語活動以外でも積極的にコミュニケーションをとる姿が見られた。
- 〈教師〉○英語活動をどのように展開していくか共通理解を図ることができた。
○英語に対する意識が変わり、自信を持って指導することができた。
- 〈地域〉○学校の英語活動に対して、理解を得ることができた。
○保護者、地域の協力を得て、積極的に英語活動を行うことができた。

(2) 課題

- 教師の英語力を高めていくため、研修の充実が必要である。
- 保護者、地域の方々の協力・支援体制の確立を図る必要がある。
- AETとの指導体制(TT)や、英語活動ボランティア・中学校英語担当者・高校生との授業形態等、さらに工夫・改善が必要である。

「『生きる力』を育てる算数学習指導」

— 「確かな学力の向上」をめざした指導法の工夫改善を通して —

川越市立武蔵野小学校

研究のポイント

- 全学年での問題解決学習の推進
- 問題解決能力の明確化のための「むさしの6つの力」の設定
- 学年間の系統性をおさえた基礎・基本の重視
- 個に応じたきめ細かな指導の充実のための少人数指導の工夫

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ①『生きる力』を「確かな学力」という知の側面からとらえ、特に算数における基礎・基本を身に付け数理的に考えていく能力、それらを進んで生活に生かしていこうとする実践的な態度を育てる。
- ②問題解決能力を算数の視点から分析し「むさしの6つの力」として明確化する。
- ③少人数指導の工夫によって個に応じたきめ細かな指導を充実し、一人一人の児童に「確かな学力」を育てる。

(2) 研究主題設定理由

①学校教育目標から

本校の学校教育目標は「豊かな心を持ち、たくましい児童の育成」である。この具現化のためには、一人一人の児童が、「確かな学力」を身に付け、自ら学び考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力を伸ばしていくことが必要である。

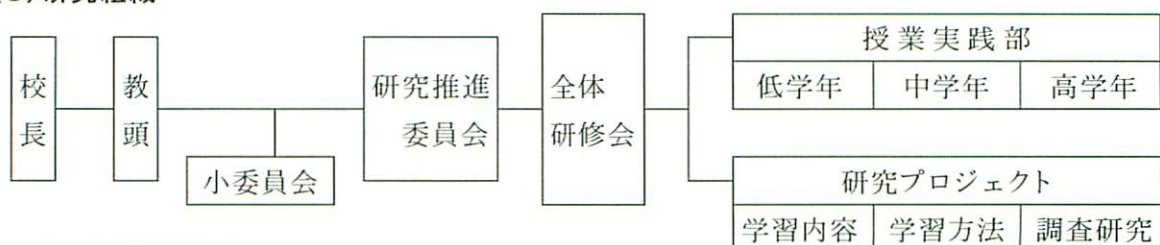
②児童の実態から

本校の児童は、挨拶がよくでき、様々な活動にも進んで取り組むことができる。しかし、人間関係をより豊かにしていく力、自己統制をしていく力がやや弱い。また、学力検査等によれば、ある程度の基礎・基本は身に付いているが、それを応用する力を伸ばす必要がある。さらに算数に対する自信がない子が多い。これらの課題を解決するためにも、表現力と共に、楽しく算数を学びながら問題を解く力を付けていくことが求められる。

③今日的・社会的な課題から

基礎・基本の着実な定着およびその応用力、すなわち「確かな学力」の育成は、変化の激しい現代社において不可欠の能力である。しかも、一人一人の個性を生かし、それに応じたきめの細かい指導法の工夫改善は、今教育改革の最重要課題である。

(3) 研究組織



2 研究の内容

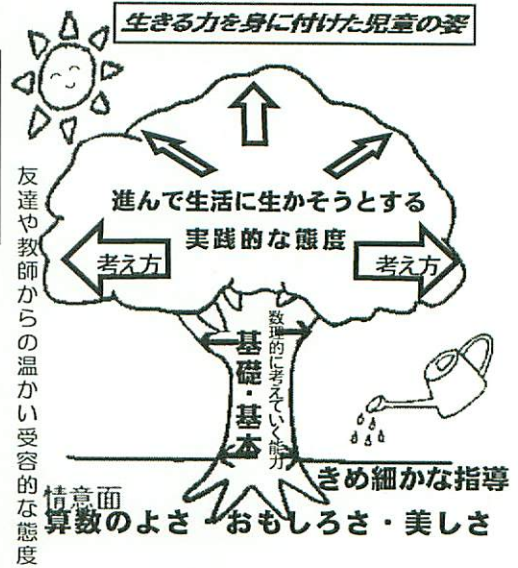
(1)研究テーマ 「生きる力」を育てる算数学習指導

－「確かな学力」の向上をめざした指導法の工夫改善を通して－
本校では『生きる力』を

- ・ 基礎・基本を身に付け、数理的に考えていく能力
- ・ それらを進んで生活に生かしていこうとする実践的な態度

ととらえた。そして「生きる力」を身に付けた児童の姿を右図のように考えた。

児童の「ああ、そうなんだ」という驚き、美しさの感動など情意面が根幹となり、大きく枝葉を伸ばしていくことが、進んで生活に生かしていこうとする実践的な態度である。



(2)年次ごとの研究内容

- 第1年次 基礎・基本の定着・基礎・基本のとらえ方（系統を追って）
- 第2年次 基礎・基本の定着・考える力の育成
- 第3年次 主体的実践的な態度の育成・・・平成17年度

(3)研究仮説 <平成17年度>

仮説1 単元ごとに目標や「付けたい力」を明確にし、様々な解決方法を認め、よりよいものを追究していくようにすれば、学んだことを進んで生活に生かそうとする態度を育てることができるであろう。

仮説2 児童の実態や学習内容によって学習方法・形態を工夫すれば、「確かな学力の向上」を図ることができるであろう。

3 実践事例

(1)『むさしの6つの力』を付ける授業の実際

これらは、教師が児童に意識付け、導いていく考え方である。そのためには、教師の深い教材研究が基となっている。

1 論理的に考える力<論理力>を付ける・・・4年「広さを調べよう」



「わけたし作戦」「ぬき作戦」など、複合図形の面積を求めるときの手順を書いた掲示物や、「～すれば、～できる」という言葉を用い、既習事項を基に、筋道立てて考えられるようにした。

2 正しく判断する力<判断力>を付ける・・・1年「どちらがながい」

自分なりのやり方を見つけたり、様々な解決方法の共通点や、友達の発表を聞いたりして、相違点に気付かせるようにした。また、児童が判断する場面では時間をしっかりとるようにした。



3 自分の考えを表現する力<表現力>を付ける・・・2年「九九をつくろう」



絵や図、言葉などを使って、自分の考えを表現するようにした。小グループでの話し合いの場を設けたり、アレイ図を発表に生かしたりして、表現力を付けるようにした。

4 友だちの考えを参考に、自分の解決を見直そうとする力 <自己評価力>を付ける

5年「小数のわり算」

話し合い活動を取り入れ、ワークシートに友達の考えのいいところをメモする欄を設けるなど、他の考え方の工夫やよさを味わうようにした。

はじめてあまりのあるわり算をやったので大変だったけど、友達の意見を聞いているうちにだんだん分かってきました。

わり算にはいろいろなやり方があるなと思った。

前のやり方（前時のワークシートをみると、（自分の解決方法がたくさんで）うらまदैってしまった。

わたしもたしかめ算を進んでやろうと思った。

5 まとめたことを次に生かそうとする力<関連付け発展的に考える力>を付ける



3年「たし算の筆算」



数の構成や十進位取り記数法の考えを用いることができるようにするために、既習事項である2位数+2位数の筆算をもとに、3位数の筆算を考えた。授業中にまとめたことや、児童の考え方などを算数コーナーに掲示していった。

6 算数のよさ、おもしろさ、美しさに感動する力<感動する力>を付ける

4年「大きな数」5年「小数」6年「倍数・約数」

小数や分数などを1つの同じ「数の世界」のものと考えることにより、児童の算数への興味関心を高めることができた。感動する力を評価するには学習感想など常に書きためていくことが必要である。

4年
大きい数の勉強をして、位が4つずつになっているのが分かりおもしろいと思った。

5年
小数でも、整数と同じ。かけ算やわり算ができるんですねすごいと思いました。



6年
6年生になって初めての算数で「倍数と約数」を習って少しむずかしかった。でもだんだん分かるようになってよかった。やり方が分かると便利だということが分かった。

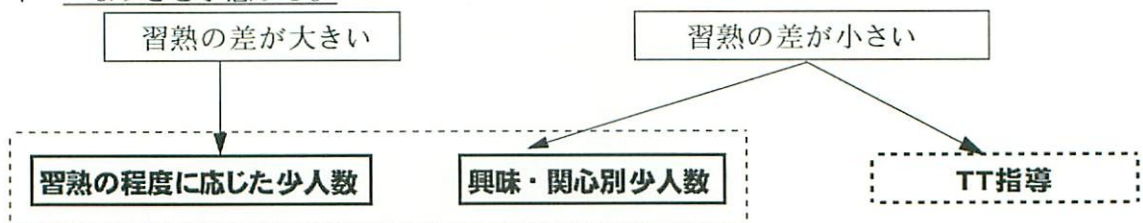
(2) 効果的な少人数指導、TT指導

① コース別学習設定までの流れ

ア 基礎・基本を明確にする。

学習指導要領解説 算数編・評価資料集等をよく読み、既習事項・新しい内容・次学年とのつながりを考える。

イ つまづきを予想する。



(コース別学習)

(一斉指導)

ウ つまづきを分析する。(コース別学習)



分かっていくこと・・・

- ・どんなコースを設定したらいいか。
- ・各コースではどんな指導内容にしたらいいか
- ・どんな支援をしたらいいか。
- ・チェックテストの問題はどうしたらいいか。

エ コースを設定する。

ポイント

児童の意欲を大切にしながら基礎・基本を身に付けさせる。



この児童には
こういう力を
付けさせたい。



ここが苦手なんだ。
分かるようになりたいな。

もっと難しい問題に
チャレンジしたいな。



オ 指導計画を作成する。(考えられるコース・付けたい力・指導内容・支援・学習方法)

コース別学習を単元のどこで設定するのか。(単元の終末・中・単元を通して)

カ チェックテストを作成する。

コースと対応するように問題を作り、配列する。(内容の分かるコース名にする)

キ TTの場合は、具体的な支援計画を立てる。

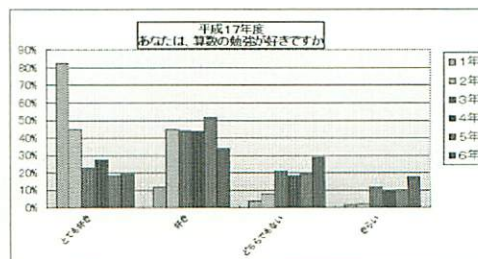
(本時の目標・支援・自力解決時における予想される児童の姿・具体的な支援方法)

4 研究の成果と課題

(1) 成果

① 平成17年度「仮説1」をうけて

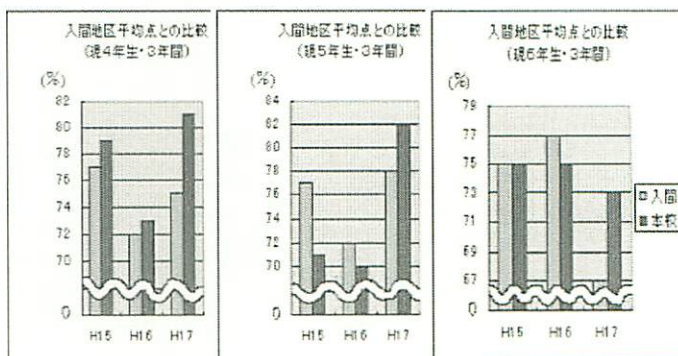
単元ごとに目標や「つけたい力」を明確にし、様々な解決方法を認め、よりよいものを追究していくことにより、児童が算数のよさを感じ意欲的に取り組めるようになってきた。



算数が「とても好き」「好き」な児童は、一昨年、昨年よりも増えている。算数の校内研修が深まった成果である。

② 平成17年度「仮説2」をうけて

問題解決学習を推進したり、少人数指導を工夫したりすることにより、「確かな学力の向上」を図ることができた。右のグラフは本研究の始まった平成15年度の入間地区算数数学学力調査の結果である。地区平均



より全体的にやや下回る傾向であったが、本年度はすべての学年が地区平均より上回り、特に少人数指導の時間が多い4、5、6年は昨年度と比べ大きな伸びを表している。

(2) 課題

成果を引き続き来年度へつなげていくとともに、研究を続け、さらに指導に生かしていく。

研究主題

「互いに認め合いながら、よりよい人間関係を築く子の育成」

～おりあいをつける話し合い活動を通して～

川越市立新宿小学校

研究のポイント

- 話し合い活動の充実を図るための様々な手立てや環境作りについて研究する。
- 人間関係を深めるための活動の工夫や場作りについて研究する。
- 自主的・実践的な態度を育成するためには、どんな手立てが有効なのかを研究する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学級活動の活動内容(1)に重点をおき、「おりあいをつける話し合い活動」を目指していく。友達の意見を認めながら、自分の考えをきちんと言える児童に育てたい。よりよい解決方法に向けて、おりあいをつけながらみんなで決め、実践する。また、実践を通して、「みんなで活動すると楽しい」「集団の一員としての自覚を高める」経験をたくさん積ませたい。そうすることによって、よりよい人間関係が育つと考えた。

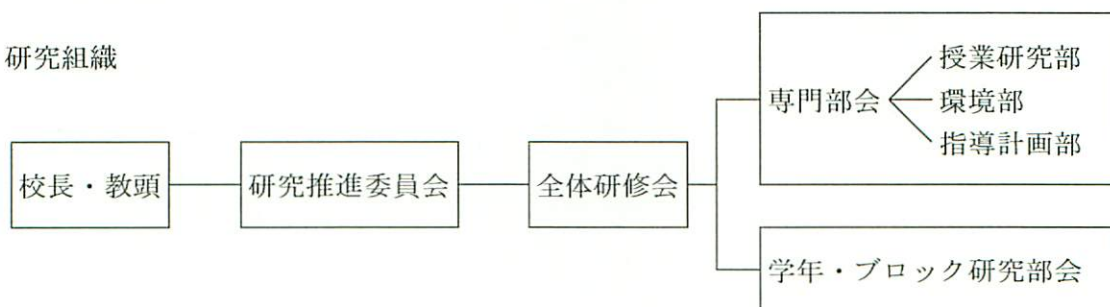
(2) 研究主題設定理由

本校は、明るく素直な児童が多い。学習への意欲があり、自分の課題の解決に向かって努力できる。全体的に、学習内容をよく理解しており、表現力も高まってきている。保護者も、学習に対する関心が高い。しかし、遊ぶ空間（場所）・時間・仲間（友達）が限られており、人とかかわる体験が不足している。そのためか、自己中心的な行動が見られたり、友達とうまくかかわれないことからの問題行動も起こっている。

そこで、昨年度より「よりよい人間関係を築くことのできる児童」「思いやりのある、心豊かな児童」の育成を目指し、学校研究の課題を『互いに認め合いながら、よりよい人間関係を築く子の育成』とし、特別活動（話し合い活動を中心とした取組）を通して、目指す児童像へと迫ることとした。

特別活動は、豊かな人間性、特に社会性の育成に大きな役割をもつ。みんなが納得できるように話し合い、よりよい学校生活を目指して実践することにより、お互いを認め合う心、協力し合う態度が醸成され、よりよい人間関係が築かれると考える。また、望ましい集団活動を通して、みんなでやって楽しい経験、自分がみんなに認められ、役に立ったという自己有用感を味わわせることで、本校の目指す学校像「互いのよさを認め合い、自分らしくよりよく生きようとする児童を育てる学校」に迫ることができると考え、本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の全体構想

社会的背景から

- ・学力の向上, 規律ある態度の育成, 体力の向上が達成目標
- ・豊かな人間性と確かな学力の育成
- ・特色ある学校教育活動の実現

学校教育目標

- やさしく
- かしこく
- たくましく

児童の実態から

- ・明るく素直な児童が多い。
- ・学習への意欲がある。
- ・自分の課題解決に向けて努力する。
- ・学習内容の理解度が高い。
- ・人とかかわる体験が不足している。

学校教育目標の具現化

- やさしく ・望ましい集団活動を通して、学級や同一学年の友達・異学年の仲間との関わり方を学ばせ、温かい人間関係を築き、居がいのある学校生活を送らせる。
- かしこく ・望ましい集団活動を通して、集団の一員としての自覚を高め、自己有用感を味わわせるとともに、個性の伸長を図る。
- たくましく ・望ましい集団活動を通して、学校生活の向上を目指して進んで考え、活動する自主的実践的な態度を養う。

めざす児童像

- ◎ 自分や友達のよさや可能性に気付き、それを伸ばそうとする子
- ◎ お互いのよさを認め合いながら、よりよい考えをもてる子
- ◎ 学校生活の向上のための課題を見付け、解決に向かって自主的に実践できる子

研究主題 「互いに認め合いながら、よりよい人間関係を築く子の育成」
～おりあいをつける話し合い活動を通して～

おりあいをつける話し合い活動 「自分もよくて相手もよい」

- 自分の意見を素直に表現できる
- 自分と違う意見を大切にする
- よりよい考えを出し合い、みんなで決めて守る



共生できる子

相手の立場を受け入れながら
自分を素直に表現でき、
主体的に集団にかかわる子

研究の重点

- ◎ 話し合い活動の充実
- ◎ 人間関係を深めるための活動の工夫
- ◎ 自主的・実践的な態度の育成

研究の仮説

- ① 計画委員会等の事前の指導を充実させ、話し合い活動の環境を整えれば、自主的・実践的な話し合い活動ができるであろう。
(事前の指導, 環境作りの充実)
- ② お互いに認め合う場を工夫、設定すれば、「自分もよくてみんなもよい」話し合い活動を展開することができるであろう。
(「認め合う場」の設定)
- ③ 事前・話し合い・事後の活動における支援を明らかにし、適切に評価すれば、人間関係を深め、集団活動に主体的に関わるることができるであろう。
(主体的に参加するための支援と評価)

(2) 専門部の取組（2年間の取組内容）

専 門 部	平 成 1 6 年 度	平 成 1 7 年 度
授業研究部	<ul style="list-style-type: none"> ○話し合いカードの作成 ○おりあいを付ける話し合い活動の検討 ○活動内容(1)に関する学年別のねらい・めあての作成 ○学年別評価規準の作成 ○指導案の形式の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ○「学級活動の手引き」作成 ○司会マニュアルの作成 ○児童用ヘルプカードの作成 ○教師用支援マニュアルの作成 ○学年別評価規準の見直し ○指導案の形式の見直し ○研究授業の実践
環 境 部	<ul style="list-style-type: none"> ○話し合い七つ道具の作成 ※下の写真参照 (学級会ノート、司会カード、黒板 掲示カード、役割表示カード、賛 成反対決定カード、時間表示カー ド、発表の仕方の掲示物) ○学級会コーナーの設置 	<ul style="list-style-type: none"> ○話し合い七つ道具の充実 ○クラスのシンボルマーク作成 ○クラスの旗の作成 ○クラスの歌の作成 ○クラブ紹介コーナーの設置 ○委員会紹介コーナーの設置
指導計画部	<ul style="list-style-type: none"> ○学級活動年間指導計画作成 ○児童の実態調査 	<ul style="list-style-type: none"> ○特別活動関係図（シラバス）作成 ○児童の実態の追跡調査、分析 ○くすのきタイムの活動の充実化

【話し合い七つの道具】



【児童の実態調査】

あなたは、学級活動が好きですか？

（2年間の追跡調査結果）

学 年 度	好 き	どちらで もない	きらい
2 年 16	89%	5%	6%
年 17	82	12	6
3 年 16	81	15	4
年 17	76	17	7
4 年 16	60	31	9
年 17	61	29	10
5 年 16	63	26	11
年 17	59	32	9
6 年 16	73	20	7
年 17	77	19	4

※ 学年は、平成17年度の学年

3 実践事例 (実践した授業研究会)

【平成16年度の授業研究会】

- ① 第5学年5組 「まごころ運動をしよう」
- ② 第3学年2組 「みんなできょう力してできるなかよし集会をしよう」
- ③ 第2学年4組 「思い出の文集を作ろう」



【平成17年度の授業研究会】

- ① 第2学年4組 「学びゅうのうたを作ろう」
- ② 第6学年3組 「学級おもしろクラブを作ろう」
- ③ 第4学年2組 「なかよし集会をしよう」
- ④ 第1学年1組 「みんなでなかよくあそぼうかいをしよう」
- ⑤ 第5学年2組 「5年2組のオリンピックを開こう」

《研究発表会》

- 第1学年4組 「まつりランドをひらこう」
- 第2学年1組 「1年生をよんで楽しいおみせやさんを開こう」
- 第3学年2組 「クラスの自まんを発表しよう」
- 第4学年4組 「4年生ピックをしよう～応援のルールを決めよう」
- 第5学年1組 「サッカー大会に力をくれた6年生にお礼をしよう」
- 第6学年5組 「学校に6年生の新宿小だましいを伝えよう」

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 自分の考えをもち、みんなの前ではっきり発表できる児童が増えてきた。発表力、表現力が高まり、話し合い活動が活発になってきた。
- ② 友達の意見を大切にしようという意識が高まった。お互いの意見を生かす修正意見や全体のことを考えた建設的な意見が多く出るようになった。
- ③ 議題の意図を明確におさえておくことで、提案理由やめあてを大切にした発言、クラス全体のことを考えた発言が増えてきた。クラスや学校をよりよくするための方法を考えられるようになってきた。

(2) 課題

- ① 学級活動(2)との関連を図り、よりよい学校生活を送ることができるようにするために、児童自らが課題に気付く芽を育てたい。
- ② 各教科、道徳、総合的な学習の時間と関連させ、意図を明確にした話し方や相手を思いやるような態度等を育てていきたい。
- ③ 授業公開等を通して、特別活動の意義を、保護者へ積極的に伝えていく。

研究主題

「一人一人を大切にせる授業の創造」

「算数科」の授業を通して

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

- I 児童の自己実現を図るために、
仮説Ⅰ「学力向上:一人一人ができるようになり、分かるようになる授業を実現れば、児童の学力は向上するはずである。」
仮説Ⅱ「自己指導能力育成:一人一人が大切にされていることを実感できる授業を実現れば、児童の自己指導能力は高まるはずである。」
とし、両者の条件を備えた「一人一人を大切にせる授業」の創造を研究主題とする。
- II 「学力向上」を目指し、指導内容・方法・形態を工夫改善する。コース別指導計画を立案し、さらに座席表の準備と活用を図ったことは、効果的である。

座席表には、本時の児童のつまずきの傾向と伸ばしたい点を記載し、指導に生かす。

- III 「自己指導能力育成」を目指し、自己決定の場の用意・存在感を大切にせる授業・人間的ふれ合いを基盤とした授業に工夫改善する。評価の観点に即して評価する際、A, B, C の評価結果別に、支援の手立てを立案し、児童の学びの《足場作り》とする。

A・・・[支援]学びの方向を示す。【承認や励まし】

B・・・[援助]学びのつまずきを乗り越えるヒントを出す。【指示やヒントカード】

C・・・[バックアップ]学びに寄り添いながら導く。【説明や学習コーナーの掲示・設営】

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 児童の学力を向上させるために、一人一人ができるようになり、分かるようになる授業を実現する。
- ② 児童の自己指導能力を育成するために、一人一人が大切にされていることを実感できる授業を実現する。

(2) 研究主題設定の理由

学校教育目標「一心豊かにたくましく生きる子ー かしこく・ゆたかに・たくましく」
に対して、本校の児童の実態は、

(長所) ○素直で明るく子どもらしい ○地道な活動にしっかり取り組む

(短所) ★自主性に欠ける ★発表や返事の声が小さい ★学力平均が低い

傾向にある。そこで、目指す児童像を、

「自分に自信をもち、生き生きと学校生活をおくる南古谷小学校の子ども」

とし、その具現化した姿を、

I 意欲的に学校生活にのぞむ子ども

II はっきり自分の意見が言える子ども

III ねばり強く取り組む子ども

IV 基礎学力を身に付けた子ども

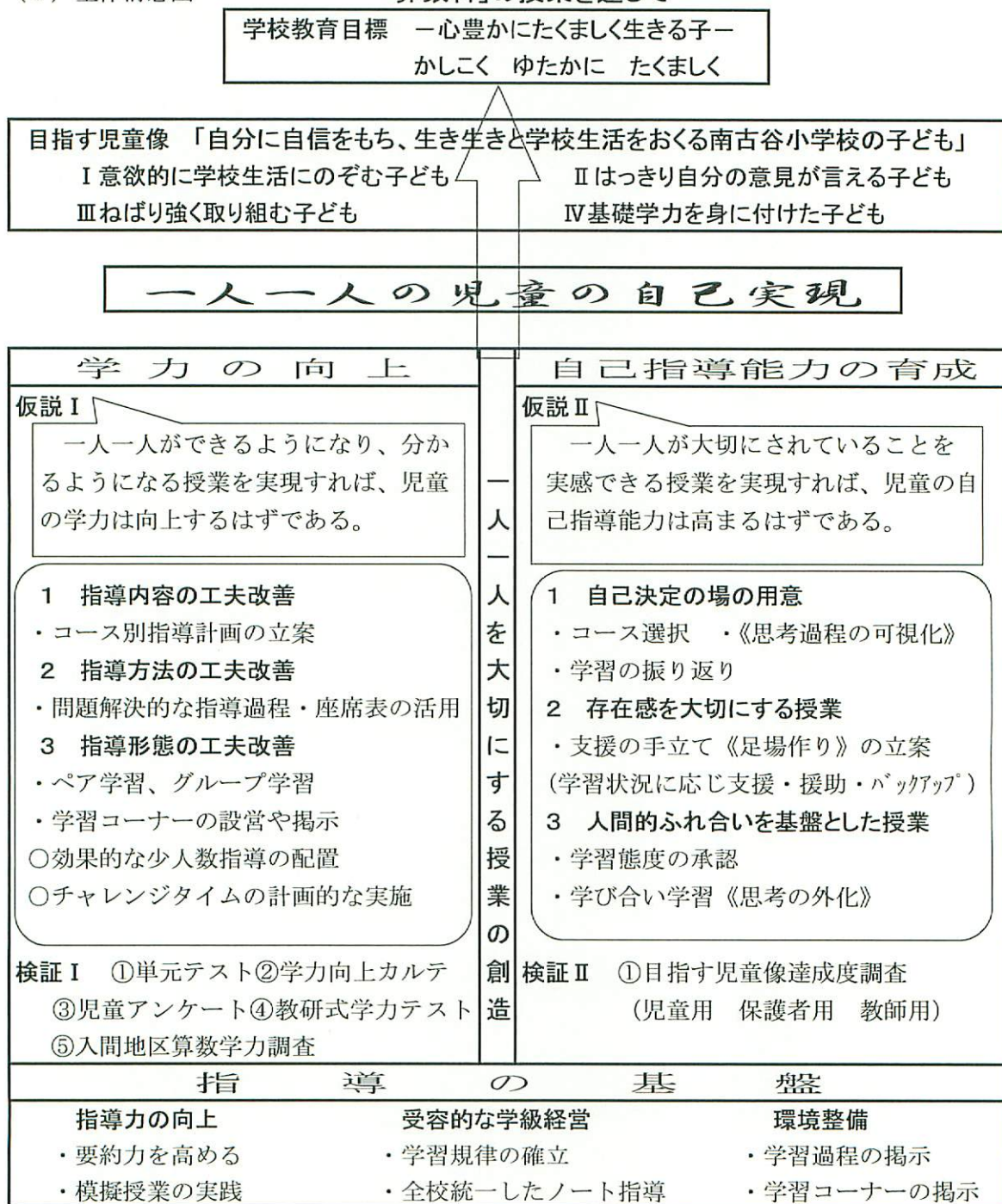
として捉えた。

(3) 研究組織



2 研修の内容 **一人一人を大切に作る授業の創造**

(1) 全体構想図



(2) 研修計画

1 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・講演「算数科におけるコミュニケーション」 ・授業研究会第2, 3, 4, 5学年 ・研究3部会・研究発表に向けての指導案検討 ・研究紀要執筆者会議・発表用封筒作成
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案完成（丁合、製本を業者へ） ・封筒原稿完成（印刷業者へ） ・研究紀要原稿完成（業者へ）→→見本の確認→→研究紀要完成→→資料の袋詰め ・研究発表指導案説明会 ・資料作成 ・研究発表リハーサル ・研究発表事前準備 ・委嘱研究発表第1, 6学年 ・研究発表報告会 ・授業研究会くすのき学級（特殊学級）
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数指導実践報告会 ・本年度の学校課題研究のまとめ ・来年度の学校課題研究の決定と計画

3 実践事例

(1) 学力の向上目指して

① コース別指導計画の立案

- コースに合ったねらいを設定
- コースによる学習内容の軽重
- コース内でのグループ学習



ペア
→
学習

② 指導方法の工夫改善

- 問題解決的な学習過程
- ・コース毎に学習過程

1つかむ→2見通す→3解く→4話し合う→5まとめる

の時間配分に軽重を付ける。

- 座席の準備と利用

・事前に、児童のつまずきの傾向や本時で伸ばしたい点を記入し、授業中、期間指導や意図的指名等に生かす。

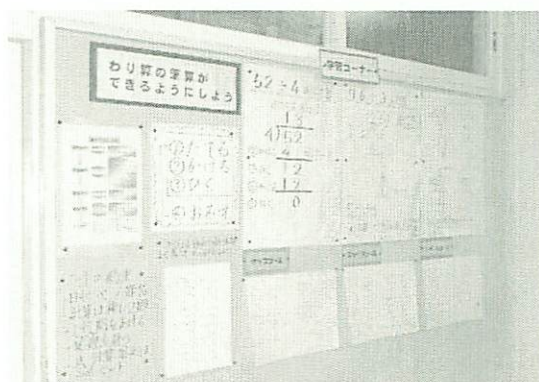
③ 指導形態の工夫

- 集団による学び合い学習

・ペア学習 ・グループ学習

- 個の学びへの支援

・学習コーナーを掲示し、学びを振り返ったり、確かめたりする。
・学習コーナーの場を作り、教師の支援を得ながら、一緒に解く。



↑
学習コーナー

(2) 自己指導能力の育成目指して

① 自己決定の場の用意

- コース選択

・発達段階に応じ、レディネステストと学習計画を基に、学ぶコースを自分で決定させていく。

- 自分の考えの表現
 - ・操作活動や図、式により、《思考過程の可視化》を図る。
- 振り返り
 - ・振り返りカードに、分かったことを自分の言葉で記入する。
- ② 存在感を大切にする授業
 - 支援の手立ての立案
 - ・評価する際、A, B, Cの結果別に、支援の手立てを立案し、学びの《足場作り》とする。

A・・・【支援】学びの方向を示す。【承認や励まし】
 B・・・【援助】学びのつまずきを乗り越えるヒントを出す。【指示やヒントカード】
 C・・・【バックアップ】学びに寄り添いながら導く。
 【説明や学習コーナーの掲示・設営】

- ③ 人間的ふれ合いを基盤とした授業
 - 学習態度の承認
 - 学び合い学習
 - ・自分の《思考を外化》し、見立て直す。他者の考えのよさに気付く。

指導上の留意点及び評価	
知	3口の数の加減混合の式の意味を理解している。(机間指導)
	(イ) 一人一人の学習状況をきめ細やかに観察評価し、指導する。 「支援の手立て」 《足場作り》
	支援；問題づくりもできている。 →チャレンジ問題に取り組ませる。 <div style="text-align: right;">【学習コーナーで掲示】</div> 援助；問題づくりが進まない。 →問題づくりの手順を想起させる。 <div style="text-align: right;">【学習コーナーで掲示】</div> バックアップ；ペア学習が進まない。 →教師と共に学習を進める。
	・本時の課題をまとめ、学習の成果を確認させる。

【指導案より抜粋】

4 研究の成果と課題

(1) 成果

児童用「目指す児童像達成度調査」から、全項目において達成率の向上がみられた。「自分に自信をもち、生き生きと学校生活をおくる南古谷小学校の子ども」に児童が変容している。

具現化した児童の4つの姿の向上 I 3.0ポイント II 4.5ポイント III 4.9ポイント IV 2.9ポイント

また、学力テストと児童用アンケートの結果から、学力向上したことが分かる。

人間地区算数学力調査 人間地区と校の平均点との比較 平均2点向上・学習意欲(児童から) 4.8ポイント向上

「一人一人を大切にする授業の創造」を「学力向上」と「自己指導能力の育成」の両面から研究してきた。上記の結果から、一人一人の「学力向上カルテ」の作成・「支援の手立て《足場作り》」の考案・座席表の活用等、児童「一人一人」を意識した指導に全職員で取り組んだこと、授業の中で、個の学習と集団での学び合い学習が成立するよう、生徒指導の観点から授業改善に努めることができたことが、成果となって表れたと考えられる。

(2) 課題

保護者用「目指す児童像達成度調査」からは、本校の研究の意図するところが理解されていない様子もうかがえる。児童の変容を通して理解していただくには時間を要するが、学校からの発信が不足していた。今後も、保護者や地域の方々に向け理解していただく機会を積極的に設けたい。また、「学力向上カルテ」は、公簿と同様次学年に送られ累積されていくが、時間を要する割に活用が十分でない。記録や活用の仕方について、検討を続けていきたい。

研究主題

「学びのよさを味わえる子どもの育成」 —指導方法の工夫・改善を目指して—

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 国語科・算数科を通して、基礎・基本の確実な定着を図り、学び方を学び、学んだことを生かし学習できる子どもを育成する学習指導を展開する。
- 子ども一人一人に応じた指導のための指導方法、指導体制の工夫・改善をする。
- オープンスペース等、本校の特色ある施設・設備を生かした新しい授業を展開する。

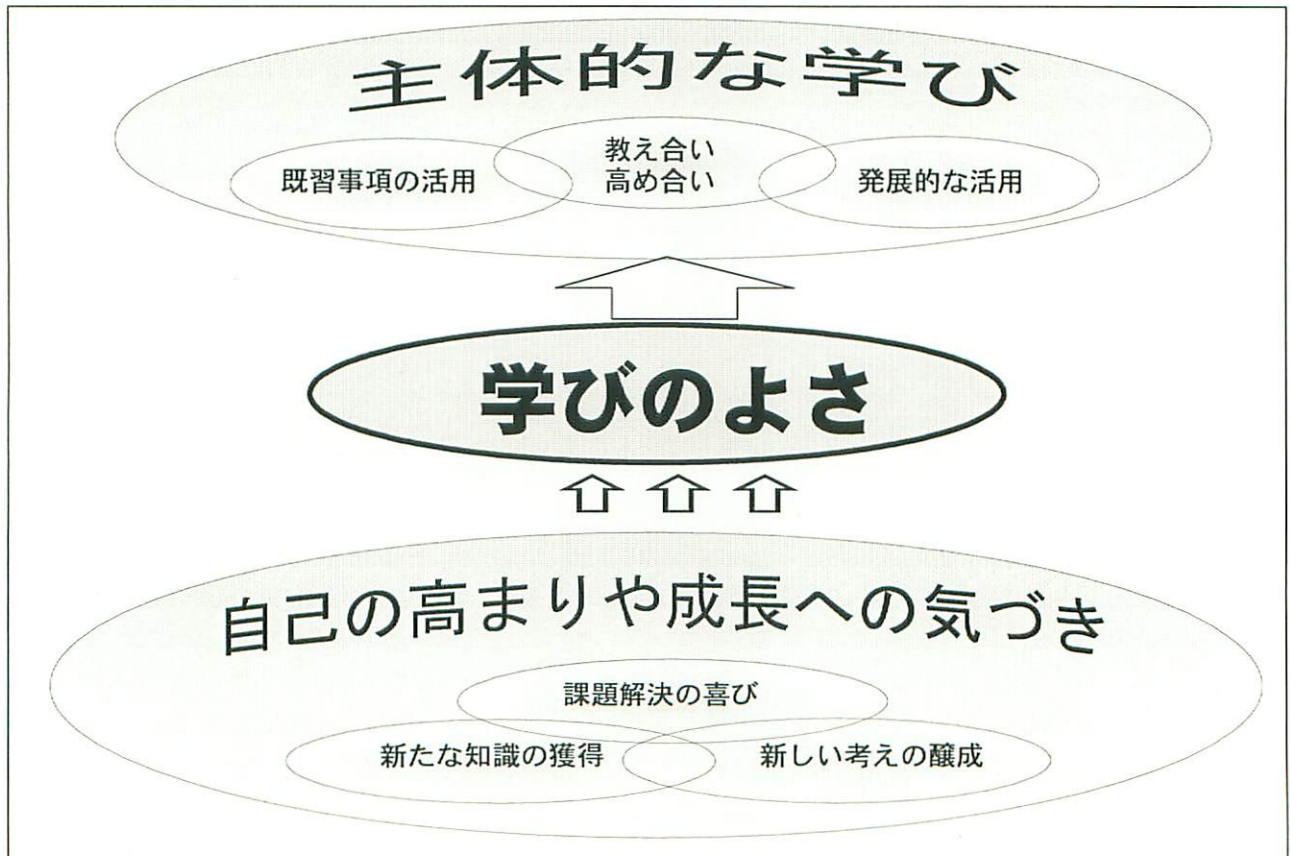
1 研究の概要

(1) 研究のねらい

児童の確かな学力の定着を目指し、本校では、基礎・基本の充実を図り、学ぶ過程及び結果における喜びを味わわせ、学習意欲を向上させていきたいと考えた。そこで、目指す子ども像を「意欲的に問題を解決する子」「学習したことを進んで活用する子」「自分の状況・成長を評価できる子」とし、学習活動において、一人一人が学びのよさを味わうことによって、主体的に学ぶ姿を育むことをねらいとした。

(2) 研究主題設定の理由

これからの多様化する社会に対応するための「生きる力」を育むには、子どもたちに「豊かな人間性」と「自ら学ぶ力」をつけていかななくてはならない。「自ら学ぶ力」とは、基礎・基本の確実な定着により、学ぶ意欲が向上していくことと考える。つまり、子ども一人一人が、自分が学習を通して力がついたことを自覚でき、その力が次の学習に生きていくことを実感したとき、学びのよさを味わうことができ、次への意欲になっていくと考える。一人一人が自分の力に応じて、このような経験を積み上げるとともに、学習活動において、自己評価能力も身に付け、自己を伸ばそうとする児童の育成を目指し、本主題を設定した。



2 研究の内容

(1) 授業研究部

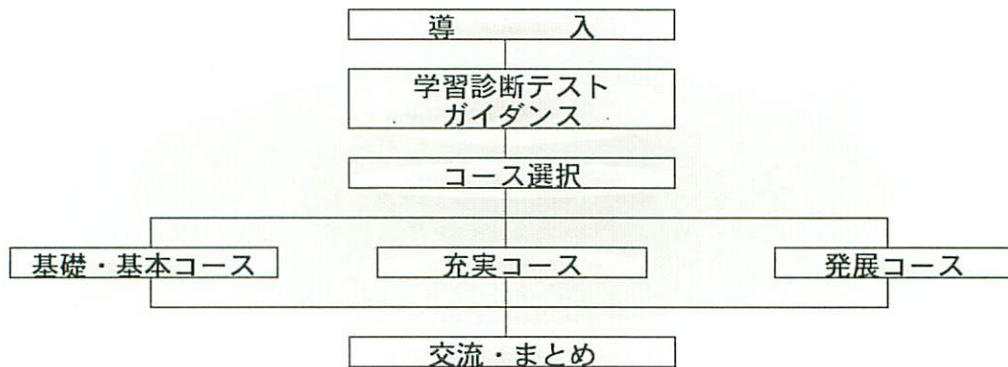
取組

授業研究部では、研究主題に迫るために、指導方法・学習形態、課題設定の工夫及び評価の工夫についての研究を進めた。指導方法・学習形態の工夫では、個の学びに応じるための習熟の程度に応じた学習の場の設定や主体的な学びを進めるための学習形態の工夫を行った。また、課題の工夫では、興味・関心を高める課題及びコース設定を行った。さらに、評価の工夫では、自己評価のための材料の提供や授業研究会での評価に関する時間の設定、補助簿による評価の蓄積を行った。

①指導方法・学習形態の工夫

○個の学びの違いに応じるための習熟の程度に応じた学習の場の設定

⇒「学びのよさ」を味わわせるために、個に応じた指導の充実を図る。

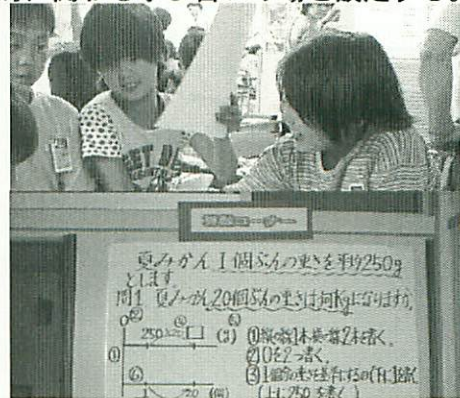


○主体的な学びを進めるための学習形態の工夫

⇒ オープンスペースを活用し、児童が積極的に関わる学び合いの場を設定する。

・子どもたちが意欲的な取組ができるようなプリント等を用意し、自分の力で課題を解決できるようにする。

・児童のノートをもとに掲示物を作成し、前時までの学習内容を振り返り、本時の課題を解決できるようにする。



②課題設定の工夫

○興味・関心を高める課題の設定 (6年算数「人口密度」より)

⇒ 問題を解決しようとする児童の意欲を喚起する。

(基礎・基本コース)

(充実コース)

(発展コース)

○どちらが混んでいるでしょうか。

A(6枚に4人の時)

B(6枚に10人の時)

C(6枚に10人の時)

○下の表は、大阪市とニューヨーク市の面積と人口を表しています。どちらが混んでいるのでしょうか。

各都市の面積と人口

	面積(K㎡)	人口(万人)
大阪市	221	260
ニューヨーク市	786	801

○下の表は、5つの都市の面積と人口を表しています。混んでいる順に都市を並べましょう。

各都市の面積と人口

	面積(K㎡)	人口(万人)
大阪市	221	260
ニューヨーク市	786	801
東京市	5	7

- 興味・関心を高めるコース設定（3年国語「ちいちゃんのかげおくり」より）
学習方法や内容がコース名で分かるようにする。

音読コース	ふきだしコース	新聞作りコース
<p>情景や心情を的確にとらえることができなかつたり、叙述から離れて自分勝手な方法で文章を読みとってしまう児童のためのコース。</p> <p>音読を中心に、教師とともに大事な言葉や文章を押さえながらゆっくりと読み進めていくことでねらいに迫っていく。</p>	<p>情景や心情をとらえることはできるが、これまでの学習状況に鑑み、少し不安が残る児童のためのコース。</p> <p>人物の心情について、ふきだしの中に入る言葉を考え、みんなで話し合うことを通してねらいに迫っていく。</p>	<p>情景や心情を的確にとらえることができ、読みとることに対しても意欲をもっている児童のためのコース。</p> <p>読みとったことをグループで話し合い、話し合ったことをもとに、新聞記事を書き進めていくことでねらいに迫っていく。</p>

③評価の工夫

- 学習診断テストなどの自己評価のための材料の提供と教師のアドバイス
⇒自分に適したコースを選択させるために、児童の自己評価能力の向上を図る。

学習診断テストの結果に基づいて、新聞作りコースを選択した児童のコース

児童名	コース	理由
山田 太郎	音読コース	音読が得意で、文章の意味がわかる。
佐藤 花子	ふきだしコース	ふきだしの言葉が面白くて、友達と話し合いたい。
鈴木 健太	新聞作りコース	新聞を作るのが好きで、自分の考えを伝えたい。

線分図をかいて問題を解きましょう。

6年 名前

ゆみこさんが10歩歩いた長さをはかったら、6.4mありました。

① ゆみこさんの1歩の歩幅は、平均何mですか。

答(0.64m)

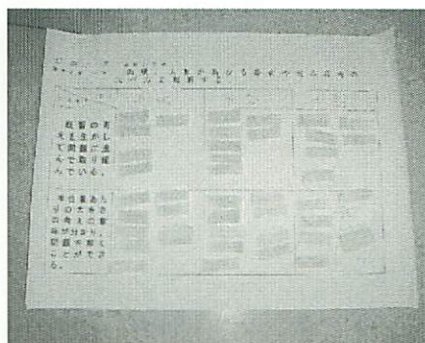
② ゆみこさんが家から学校まで歩いたら、850歩ありました。ゆみこさんの家から学校までの道のりは何mですか。

答(5424m)

- 授業研究協議会での評価に関する協議
⇒教師の評価能力を高め、指導と評価の一体化を図る。

・各コースごとに抽出児童を3名決め、評価規準をもとに、その児童の評価についての協議を行う。

- 話し合いの手順
- ①授業には、各学年3コースに割り振り参観
 - ②抽出児童3人の活動の様子を観察し、評価規準に基づいて評価する。
 - ③ABC3色の付箋紙に評価の理由を記入する。
 - ④付箋紙を評価一覧表に貼る。(右写真参照)
 - ⑤評価の食い違っていたところを中心に、司会者が、詳しく理由を聞き、意見を交流する。
 - ⑥場合によっては、評価規準をより具体的にとらえなおし、あらためて評価しなおす。
 - ⑦評価の問題点や課題を整理する。



(2) 環境整備部

取組

環境整備部では学びのよさを味わえるように、学んだことの確認や活用の面に力を入れた。まず学習した内容をいつでも振り返ることができ、それを使って次の学習の助けにすることができるよう、教室前方に掲示棒を作成し、学習コーナーを設置した。また、国語に関する興味・関心を高め、学びを生かして楽しむことを目的に校舎の各階に国語の掲示物コーナーや図書コーナーを設置した。

掲示棒の活用方法

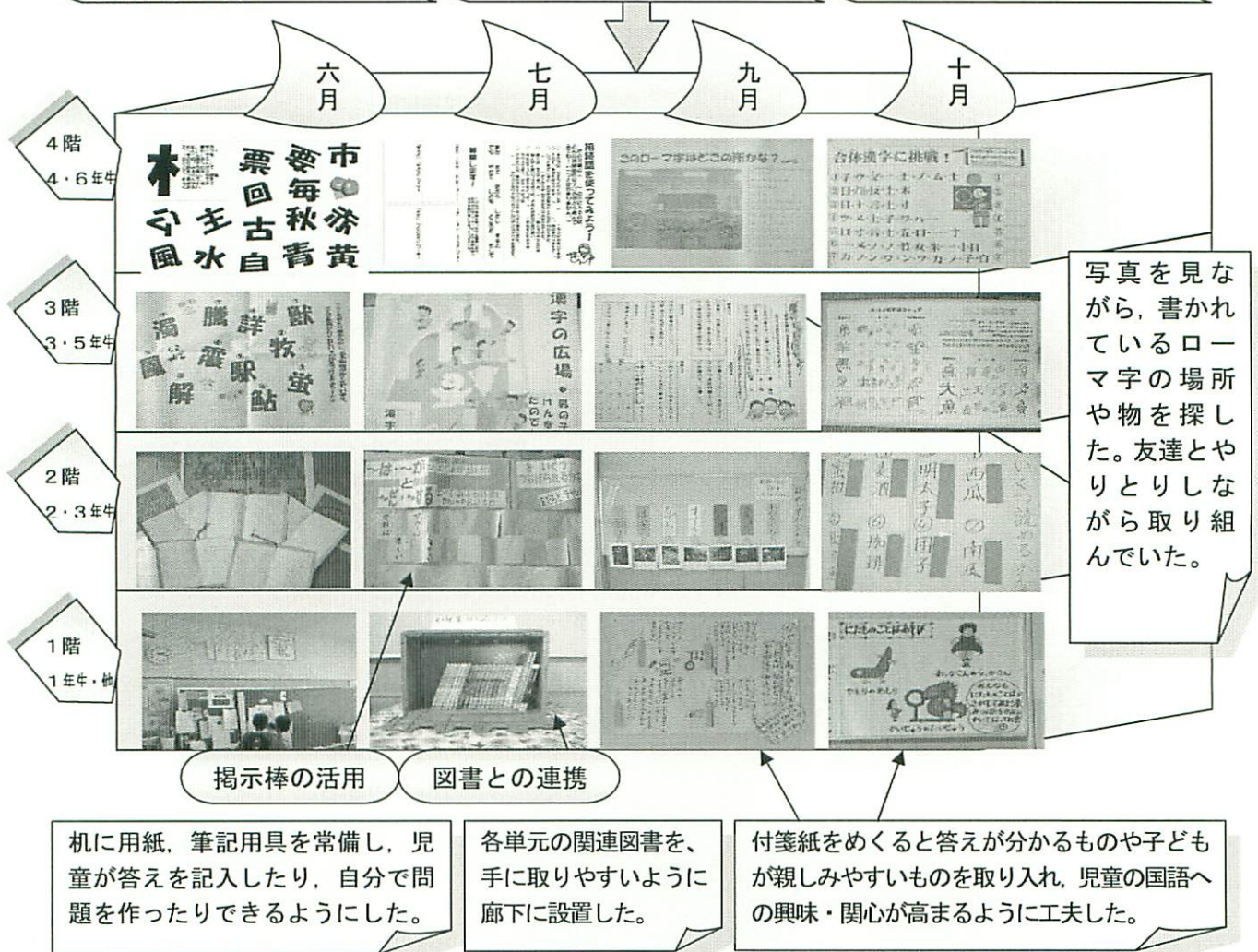
- ① 作文の校正ポイント資料の掲示
- ② 教材文の掲示
- ③ 児童の作品の掲示
- ④ 場面絵の掲示

掲示物の作成

- ① 言語に関すること
- ② 作文に関すること
- ③ 読み物に関すること
- ④ 「話すこと」に関すること

図書との連携

- ① 短歌・俳句
- ② 同じ作家の作品
- ③ 生き物に関する本
- ④ 歴史に関する本



3 成果と課題

- 児童は、習熟度別、興味関心別、課題別などの多様な学習形態を経験してきた。その中で自分が学習したいコースを主体的に選択することで、学習意欲の向上を図ることができた。また、自分の力に合わせた学習課題や学習方法に取り組むことによって学びのよさを味わうことができた。そして、国語・算数好きの子ども育成が図られた。
- 少人数によるコース別学習に積極的に取り組み、学習の手引き、細かいステップによるプリントなど 個へのきめ細かい指導・支援方法の充実により、児童の発展的な学習への取組や支援を要する児童への 指導が充実し、分かる喜びや学びのよさを味わうことができた。そして、学習したことを活用する力もついてきた。
- 習熟度別学習で、中位のコースの個人差が大きい。その中で個への対応についての指導法を工夫する必要がある。
- 本校の特色ある施設を生かした場の活用についてさらに工夫する必要がある。

「自ら課題を見つけ、主体的に解決する子の育成」

～指導方法の工夫と改善を通して～

川越市立上戸小学校

研究のポイント

- 個に応じた支援の充実を図るための少人数指導
 - ・学年内TTによる指導
 - ・コース別学習（習熟度、課題別、興味関心別）の実践
- 問題解決学習の推進
 - ・学習過程の工夫（つかむ→見通す→解く→考え合う→まとめる→ふりかえる・広げる）
 - ・ノートの活用、学習の手引きの作成
- 学習状況の調査
 - ・児童の学習に対する意欲、基礎学力の定着

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

指導方法の工夫と改善を通して

- ① 基礎・基本の定着を図り、確かな学力を身につけること
- ② 自ら課題を見つけ、主体的に解決する子を育成すること

をねらいとして、研究を進める。

(2) 研究主題設定の理由

学力低下が懸念される現在、わかる授業を通して「確かな学力」を育成することが学校教育に求められている。確かな学力を育成するには、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るとともに、個に応じた指導を柔軟かつ多様に導入することが必要である。そのためには、児童の主体的な活動を重視し、楽しさと充実感のある学習活動を行っていくことが大切である。

本校児童を見てみると、素直で子どもらしく学習へも意欲的に取り組んでいるものの、自分の思いを表現したり自分で問題を解決することを苦手としている児童が多く見られる。

これらのことから、見通しを持ち、自分で考え判断したり、問題を解決していく力の育成が必要であると考えた。そこで、全職員共通理解のもと「自ら課題を見つけ、主体的に活動する児童の育成」を研究主題に設定し、指導方法の工夫・改善（問題解決的な学習過程や個に応じたきめ細やかな指導、支援、評価等）を通して基礎・基本の定着を図りながら、研究主題に迫っていくこととした。

2 研究の内容

研究主題

自ら課題を見つけ、主体的に解決する子の育成

算数科の指導方法の工夫と改善を通して

めざす児童像

低学年

自分の課題をもち、
生き生きと取り組む子

中学年

自分の課題をもって取り組む子
自分の考えを表現する子
自ら課題を見つけ取り組む子

高学年

見通しをもって課題に取り組む子
自分の考えを進んで表現する子
学び方を身につけ高め合う子

研究仮説

指導方法を工夫改善し、問題解決的な学習過程を通して、個に応じたきめ細かな指導や支援・評価を行っていけば、基礎基本の定着を図ることができ、「自ら課題を見つけ、主体的に解決する子」を育成することができるであろう。

問題解決的学習

授業展開を、次のようにする。

- (1) つかむ (2) 見通す (3) 解く
- (4) 考え合う (5) まとめる
- (6) 広げる・ふりかえる

自力解決する時間や様々な考えを
練り上げてまとめていく時間を十分に確保する。

少人数指導

一人一人に応じたきめ細やかな
指導——少人数指導を行う。

- (1) T Tによる指導
- (2) 習熟度別少人数指導
習熟度によるコース別学習
- (3) 課題別少人数指導
興味関心によるコース別学習

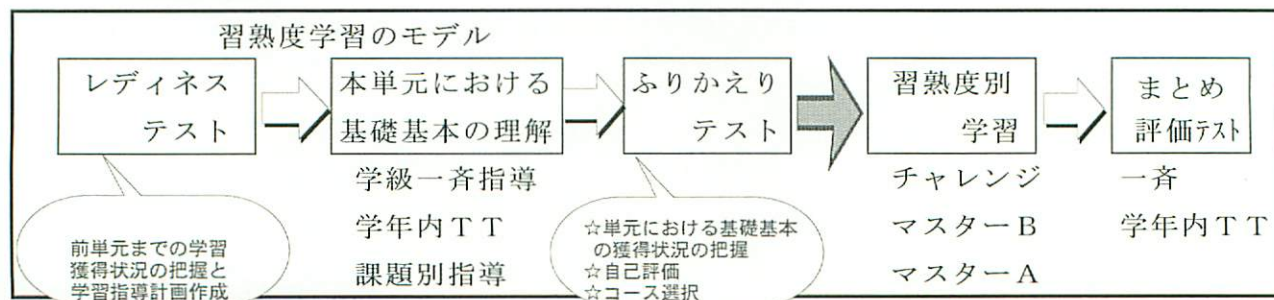
3 実践事例

(1) 指導法・指導体制の工夫

少人数指導担当の効果的な配置



習熟度学習のモデル



(2) 問題解決学習とノート指導について

個に応じた支援をより確かなものとするため、問題解決学習において、一人ひとりの考え方やつまづきわかるノート指導を行った。

- (1) ノートは単に板書されたものを、正確に写し取るだけのものではない。数学的な考え方や思考力を養うことが算数であるなら「書きながら考え、考えながら書く」ようなノート指導を行った。
- (2) ノート指導を通して、課題や学習内容のまとめ、疑問点や感想を書くなど、学習したことを振り返ったり「わかる喜び」を体験させた。
- (3) 書くことによって、学習時間の確保ができ、基礎・基本の定着につながるようにした。
- (4) つまづいている子への、個に応じた支援がしやすいものとした。

ノートは、子どもが学習をふりかえるとともに、学習状況を理解するための資料ともいえる。そこから、子どもの思考過程、あるいは、学習の理解・興味関心なども読み取ることができる。本研究では、以下のノート使用例を原則的に学年の発達段階に応じてノート指導を行った。

日付	学習内容
1.	今日の問題（課題）
2.	解決の見通し <ul style="list-style-type: none"> ・どのようにすれば解けそうか？ ・結果はどのようになりそうか？
3.	問題を解く <ul style="list-style-type: none"> ・途中の式や計算を残す (消しゴムは使わない) ・間違った所は、一線で消す
4.	話し合いで出た自分以外の考え (友達の良い考え方など)
5.	・練習問題をとく
6.	学習のまとめを書く
7.	今日の自分の勉強の仕方で良かったことや反省などを書く

ノート指導

評価資料としても活用します。

○つまづいている子への、個に応じた支援がしやすいものとする。
 ○ノート指導を通して、課題や学習内容のまとめ、疑問点や感想を書くなど、学習したことを振り返えさせる。
 ○基礎・基本の定着につながるようにする。机間指導で必要に応じて助言などを行う。

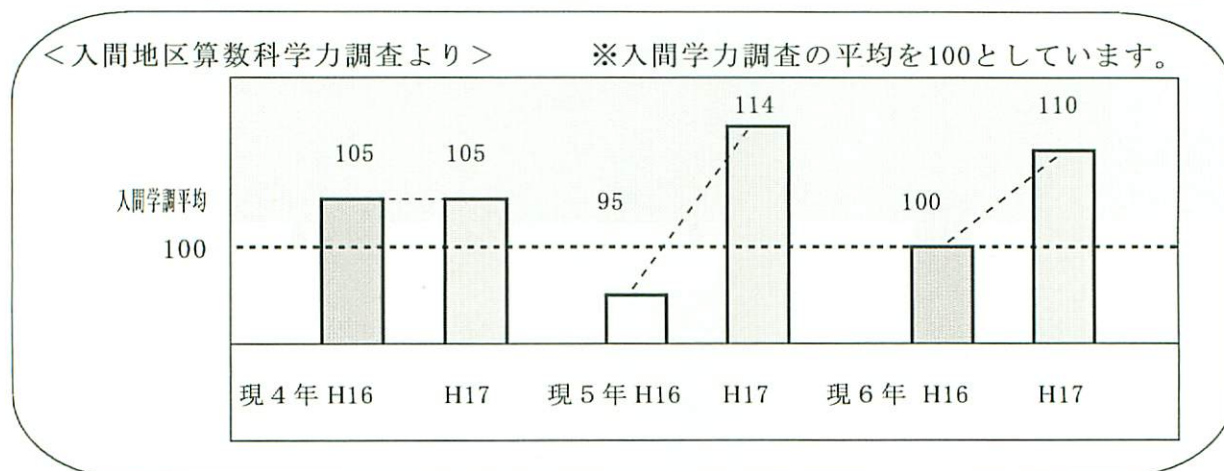
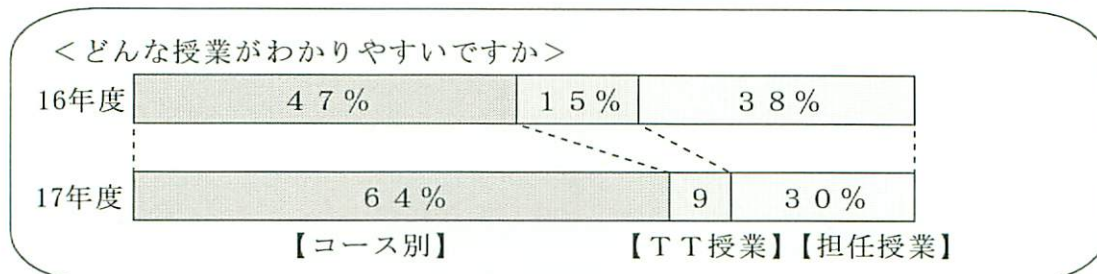
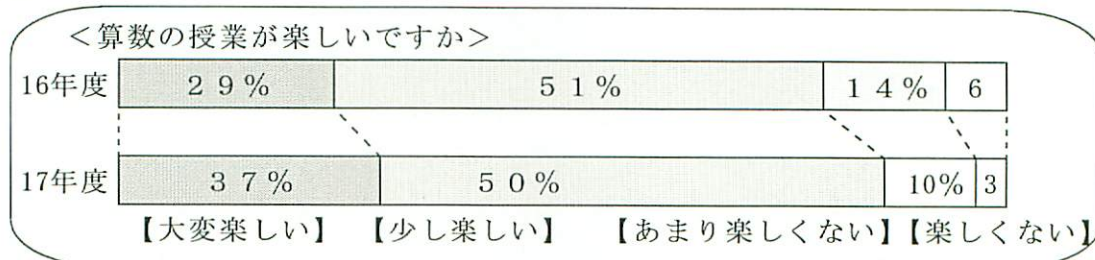
低学年	中学年	高学年
○基本的なノートのとりかたを身につけさせる。	○次第に自分の考えを入れてノートをとることができるようになる。	○自分の考えをはっきり述べてノートに書き、算数を作り出していけるようにする。

問題解決学習での授業実践（研究発表会より）

見通す	解く
<ul style="list-style-type: none"> ・答えはほしいどのくらいか。 ・予想してみよう。 ・どんな考え方、方法ならできるかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・確かめてみよう。 ・別の考え方、方法でもやってみよう。 ・説明できるようにまとめてみよう。
<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項に関連づける。 ・既習事項のアイデアを想起させる。 ・見通しから児童自ら解決方法を考えさせる。 ・解の見通しがつかない児童には、早めに支援をする。(ブロック図などで説明する。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自力解決の時間を確保する。 ・個に応じた支援をする。(具体物の活用やその操作、ヒントカード、ヒントコーナー、個人への教師の助言など) ・単純化した数値で考えさせる。 ・他の方法で考えさせる。 ・途中の式や計算を残すようにする。

4 成果と課題

(1) 成果



- 「算数ノートの活用」の仕方を共通理解することで、学習過程の「まとめる」段階において、わかったことや感想などを自分の言葉でまとめる「自己評価」が定着してきた。このことにより、個に応じた指導と評価の一体化が図られ、児童が学習に一層意欲的に取り組むようになった。
- 少人数指導を計画的・継続的に実施することで、児童の自己評価・自己決定する力が高められ、自分のめあてに応じたコース選択ができるようになった。また、教師にとっては、個に応じた支援の仕方や指導方法を高めることができるようになった。
- 単元の基礎・基本や指導計画を見直し作成したことにより、より充実した授業を展開することができ、児童に確かな学力の定着を図ることができるようになった。

(2) 課題

- 「解く」段階での授業内容や展開の仕方の工夫。
- 「考え合う」段階で考え方を発表し合い、よりよい考えを導き出し深め合うための「練り上げ」の工夫。
- 少人数指導における個に応じた支援計画の充実。
- 児童一人一人の学びの様子から、評価規準にどの程度到達したかを観察する評価の仕方。
- 算数的な活動を促す教材や補充教材・発展教材の開発、及び「小テスト」の充実改善。

「生徒一人一人に確かな力を身に付けさせる学習指導法の研究」

川越市立山田中学校

研究のポイント

「自主・自律の力」を「確かな力」と捉え、その育成のために

- 授業や基礎学習タイムの指導法を工夫改善し、基礎基本の習得を図る。
- 生徒会活動やボランティア活動を通して、自主的・実践的な態度を育成する。
- 「確かな力」の育成に必要な教員の課題意識の明確化と指導力の向上を図るために、新たな教員研修制度を確立する。
- 保護者・地域社会の外部評価を導入し、広い立場から指導力改善を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学校教育目標を具現化するために、新しい研修制度を確立して教員の資質の向上を図り、「基礎基本の習得」「自主的・実践的な態度の育成」を目指す。

(2) 研究主題設定の理由

本校は「ふるさと山田（川越）に自信と誇りを持てる生徒の育成」という教育目標の下、その具現化を目指して教職員・家庭・地域社会が連携をしながら教育活動に取り組んでいる。生徒の多くは将来、この地域を支える担い手になる。そのような生徒に、自分たちの住んでいる地に自信と愛着、誇りを持たせることが地域に信頼される学校のあるべき姿ととらえ、本校の学校教育目標を設定した。さらに、生徒が地域の一員としての自覚を持って行動するためには、何を実践すればよいかを自ら見つけて行動できるようにすること、すなわち、生徒に何事にも「自分が」「自分で」「自分から」といった意識を持って行動する力を身に付けさせることが不可欠と考えた。この自主・自律の力こそが本校の生徒に最も身に付けさせたい力（確かな力）ととらえ、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

〈仮説1〉生徒が教科の授業や特別活動の中で、主体的に考えたり、行動したり、自己決定をする場面を計画的に設定すれば、生徒一人一人に確かな力を身に付けさせることができるであろう

〈仮説2〉基礎・基本を習得させれば、それが一つの自信となり、自ら進んで物事に取り組んでいくことができるであろう

〈仮説3〉教員の指導力が向上すれば、基礎・基本の定着、自主的・実践的な態度の育成を図ることができるであろう

(2) 研修部の取組

新たな教員研修制度を確立し、従来の全体研修と並行して全教員が個人研修として「機関研修」「指導者研修」「自己研修」の3つの研修を3年間でローテーションで行うようにし、資質の向上に努める。

機 関 研 修	<ul style="list-style-type: none">○ 県教育委員会または市教育委員会主催の教科及び担当分掌関連の研修会を受講する。○ 個人研修中間報告を年1回校内研修会で行う。○ 研修の成果を報告書としてまとめる。
指 導 者 研 修	<ul style="list-style-type: none">○ 年度当初、担当教科及び担当分掌について指導して下さる指導者を決定する。○ 指導者と協議し、研修テーマ（課題）を設定する。○ 指導者を招聘し、研究授業を実施する。○ 個人研修中間報告を年1回校内研修会で行う。○ 研修の成果を報告書としてまとめる。
自 己 研 修	<ul style="list-style-type: none">○ 年度当初、担当教科及び担当分掌に関する研修テーマ（課題）を設定し、自身で研修を深める。○ 個人研修中間報告を年1回校内研修会で行う。○ 研修の成果を報告書としてまとめ、保護者代表・評議員を交えた報告会で発表する。

(3) 向上部の取組

アンケートや諸調査を行い、本校生徒の実態を把握・課題の明確化を行い、以下の取組を行う。

① 学力向上

ア 新しい研修制度を活用し、各教科における指導法の工夫改善を行う。

イ 基礎・基本の定着を図るため、毎週火曜、水曜の朝に全学年で20分間の「基礎学習タイム」を設定し、計算と漢字の学習に取り組みさせる。漢字は、「学年別漢字の練習」の各ページの書き取りを行い、自分が書けない漢字を中心に自分のペースで進めていく。学習範囲ごと（最初は自信を持たせるために小3レベルから開始）に小テストを行う。計算は、「基礎徹底ドリル」を自分のペースで解き、TT方式で、基礎学力に欠ける生徒に対応する。各学年毎に範囲を決め、定期テストに出題する。

② 生活向上

ア 基本的な生活態度の向上

(ア) 教師の取組

- 各月、各週毎に指導の重点を明確にし、共通理解・共通行動の徹底。
- 日常生活において課題の校内掲示→視覚に訴え、生徒の課題の意識化を図る。

(イ) 委員会活動の取組

- 美化委員会→無言清掃・朝清掃の呼びかけ、身の回りの整理整頓の徹底。
- 生活委員会→身だしなみ・時間を意識した行動の呼びかけ。
- 学級委員会→チャイム着席の呼びかけ、床磨きの実践と呼びかけ。

イ 自己表現力の育成

授業や帰りの会でショートスピーチや意見発表の場を設け、継続的に実施。

ウ 時と場に応じた言葉遣いの指導

学年毎に学年集会や学活でソーシャルスキルを実施。

③ 体力向上

ア 体育分野

体育の授業において、体力を高める要素を導入で取り入れ、体力向上に取り組み、体カトレーニング（腕立て伏せ・腹筋・背筋を各20回）を取り入れる。

イ 保健分野

保健だよりを活用して疾病や季節の記事とともに、睡眠の大切さ・朝食の重要性等、生活習慣に関する記事を毎月載せ、生徒や保護者への啓発に努める。生徒保健委員会の活動では、歯の衛生週間など時期に合わせてポスター掲示や校内放送を行い、全校への啓発に努める。学校保健委員会では、給食センターの学校栄養士に『中学生の食生活』というテーマで講演をいただいた。

(4) 生徒活動部の取組

① 特別活動等を通して積極的な行動力を育成するために、生徒自身が考え行動するための環境作りや生徒の自主的な行動を支援する体制作りを進める。

② 地域を理解し、地域社会の一員としての自覚を持って行動できる生徒の育成を目指し、地域清掃や地域行事への参加、特別養護老人ホーム等、保護者や地域住民との連携・交

流を深める活動を計画的に推進する。

③ 具体例



[保護者の方と一緒に大排水路清掃]



[毎朝行われるボランティア清掃]

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- 新たな教員研修制度を設けたことによって「個人研修」を行う体制を整えることができた。そのことにより、教員一人一人の研修に対する意識が向上し、研修内容を生徒へどのような指導方法で還元していくかの工夫改善がなされ始めた。
- 学力の向上を目指す取組として、週2回の「基礎学習タイム」を設け、基礎・基本の定着を図った。特に、数学の計算練習ではT・Tによる指導法を取り入れたことによって、教員への質問が活発となり、成績が下位の生徒の正答率が上がってきた。
- 生徒の活動では、地域行事や福祉活動へ参加する生徒が多くなり、地域の一員としての意識が高まってきた。また、毎朝自主的に教室や廊下を清掃するなど「自分が」「自分で」「自分から」といった意識を持って日常の生活に取り組んでいる生徒も見受けられるようになった。
- 体力の向上を目指す取組として、体育分野と保健分野の関連を明確にできた。「食生活の改善と体力の向上」をテーマに、体育分野では生徒の持っている運動能力と栄養素の関係について、保健分野では朝食の摂取意義の重要性について理解させるようにポイントを絞って指導することで、生徒の反応もよく興味・関心を持つ生徒が増えた。

(2) 課題

- 学力向上を目指すためには、週2回だけの取組では時間が足りず、家庭学習の充実を指導していくことが必要である。そのために、保護者会や生徒との二者面談等を通して必要性を啓発していく。
- 生徒会活動の中で地域行事やボランティア活動等に参加する生徒が増えたが、その経験から得た奉仕の心や自律の力が日常生活の中で生かし切れていないことがある。今後さらに、表現力を豊かにするショートスピーチや自治能力を育てる委員会活動を充実させ、個々の生徒が自分の思いを自由に表現できる場作りを工夫していく。
- 「確かな力」を「自主・自律の力」と捉え、教育活動全般を通じて育成に取り組んできた。今後さらに、生徒一人一人に確かな力を身に付けさせやすい環境づくりを目指して、家庭・地域との連携を密にしていく。

研究主題

「一人一人の教育的ニーズに応じた学習内容と指導法の工夫」

一特殊学級における指導法の研究及び通常の学級における特に配慮を要する
児童への適切な支援・指導の在り方の研究一

川越市立名細小学校

研究のポイント

- 特別な配慮・支援を必要としている児童に対して、実態を的確に把握しその個性の理解を図り、適切な支援・指導を計画・立案する。
- 特殊学級及び通常の学級で特に配慮・支援を必要としている児童の指導方法を研究することにより、個に応じた学習参加の在り方を開発する。
- 個々の児童の教育的ニーズに応じた教育環境を整え、校内支援体制を充実することにより適切な支援を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ①一人一人の教育的ニーズに応じた、適切な教育的支援のあり方を研究する。
 - ・特に配慮・支援を必要としている児童に対して、実態を的確に把握しその個性の理解を図り、適切な支援・指導を計画・立案する。
- ②授業研究を通して、適切な支援の方法を探り、個に応じた学習参加のあり方を開発する。
 - ・特殊学級及び通常の学級で特に配慮・支援を必要としている児童の指導方法を研究することにより、個に応じた学習参加の在り方を開発する。
- ③一人一人の児童が安心して、日々の学習や諸活動に取り組むことができるように、校舎内外や教室の掲示を工夫し環境を整備充実していく。
 - ・個々の児童の教育的ニーズに応じた教育環境を整え、校内支援体制を充実することにより適切な支援を図る。

(2) 研究主題設定の理由

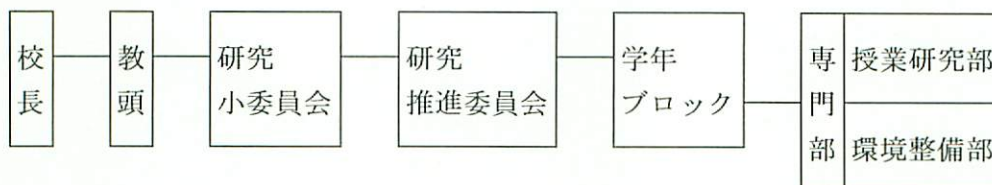
本校の特殊学級では校内協力体制のもと、個別の指導計画に基づき、個に応じたきめ細かな指導を行っているところである。今後は更に個別の支援計画の作成と共に、障害の多様化に伴う一人一人の教育的ニーズに応じた教育的な支援が重要となってきた。

昨年度実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」によると、知的に遅れはないが学習面・行動面において特別な教育的支援を必要とする児童も見られた。その際、児童への支援の在り方が担任の裁量によるところが大きく、対応がまちまちであったり、年度をまたいでの継続的な支援が十分とは言えなかったりする状況もあった。これからは、通常の学級においても、特別支援教育の観点から、一人一人の教育的ニーズに応じた支援を必要としている児童に対する指導の在り方の共通理解が重要となってくるのではないかという視座を得た。

そこで、今までの本校における特殊教育で積み上げてきた教育的支援の実践や川越市の

特別支援教育の実践に学び、教職員一人一人が特別な配慮・支援を必要としている児童生徒に対して、その実態を的確に把握し、個性を理解すると共に適切な支援・指導の在り方を研究し、併せて教育環境・校内支援体制を整備・充実することにより、児童一人一人の教育的ニーズに応じた支援が可能となり指導がより充実していくものと考え、本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 授業研究部の取組

①児童の実態把握。

- ・校内特別支援委員会との連携による、実態把握の手立ての研修。

②個別の指導計画・支援計画の立案。

- ・対象児童の指導計画・支援計画の立案を校内特別支援委員会との連携のもと行う。

③学習指導法の工夫。

- ・個別の支援をしやすい学習指導案の工夫。
- ・指導方法の研究。
- ・特学でのT・Tを行う。（通常の学級の担任と特学の担任の交流を行う。）

(2) 環境整備部の取組。

①教室内・校舎内外の掲示の整理。

- ・行事等にかかわる計画が、児童にもよく分かるよう、工夫して掲示する。
- ・校内諸表示の掲示の仕方を工夫する。
(色や表記の仕方を工夫してより分かりやすいものにしていく。)

②学習コーナーの整備・充実

- ・学習補助具の整備。
(おはじき、ブロック、学年ごとの漢字表、学習補助具を掲示したり用意したりしておく。)

③児童支援教室（スペース）の整備・充実

- ・教師が児童を指導したり、児童が静かに気を落ち着けたりすることができる教室を整備。

④校内支援体制の図式化

- ・支援が必要になったとき、どのようにしたらよいかを図式化して明示しておく。

3 実践事例

第4学年 理科学習指導案

- 1、単元名 ものの温度とかさ
- 2、単元設定の理由
- 3、児童の実態 本児の実態も

4、研究主題とのかかわり・・・(ここが学習指導案のポイントとなる部分)

本校の研究主題「一人一人の教育的ニーズに応じた学習内容と指導法の工夫」を具現化するために、次のような手だてを考えた。

《本児に付けさせたい力》

- ・グループ活動を通して、友達との会話や実験を楽しみ、自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりすることができる。
- ・何を調べるために実験しているのかがわかり、手順に従って実験をすることができる。
- ①実験のやり方を、絵と分かりやすい言葉で説明したり、記録の書き方の例を提示したりするなど、視覚的なものを添え、作業に取りかかりやすい環境を整える。
- ②一指示、一提示を基本とし、一つ一つやり遂げているという達成感をもたせながら授業を進める。
- ③実験をするときのそれぞれの役割を明確にし、集団参加がしやすくなるよう工夫をする。
- ④活動の態度や成果を誉め、認めることで、安心感をもたせ、学習への意欲づけを図る。

5、単元の目標

6、評価基準

7、指導と評価の計画

8、本時の学習（5／9時）

(3) 展開

学習活動	学習指導上の留意点と支援◎評価	本児への支援◎評価 ◆研究主題との関わり	資料・準備
1 前時の実験で分かったことを確認する。	・前時の水のかさの変化の実験を振り返らせる。	・学習に集中できているか、姿勢や表情を	・児童の実験カード
2 空気のかさの変化を見る実験セット(ゼリーの目印)の絵を見て、お湯で温めたときの様子を予想する。	・空気の変化を視覚的にとらえるためにゼリーを目印にしたガラス管を提示する。 ・予想をグループで話し合い、発表させる。 ・課題を提示し、学習内容が明確になるようにする。	◆①実際に実験器具を見せながら説明し、予想を立てやすくする。 ・学習リーダーの進行に協力しながら、自分の考えを話せるよう、声をかける。	(フラスコ・水槽・ガラス管付きゴム栓)
3 本時の学習課題を知る。			・課題の板書用カード
4 かさが大きく変わるのはどっち？(水・空気)			
空気と水を温めたときのかさの変わり方	・かさの変化を比べるには、同じ器具を使って、同じ条件で行う	・予想が書けないときは、実験方法をもう	・実験カード

<p>の違いを予想する。</p> <p>5 実験の方法を確認して、実験をする。 ①お湯で温める</p>	<p>ことを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験方法を分かりやすくするため、フラスコや水槽の絵を実際に動かしながら提示して、予想を立てやすくする。 ・前時までの、空気と水のかさの変化の実験を基にして予想させる。発表では予想の根拠も言わせるようにする。 ・実験はグループで協力してできるよう、役割分担を決めて交替で行う。 ・実験器具を気を付けて扱うよう声をかける。 	<p>一度詳しく説明し、書き方の助言をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆④自分の考えを書けたことを賞賛し、励ます。 ◆②まず、温める実験だけを行い、その結果を確認してから冷やす実験をさせる。 ◆③本児のグループ内での役割を確認し、分担した仕事ができるよう励ます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バインダー ・準備の手順と分担掲示
<p>8 課題のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の発表から、学習課題のまとめをする。 		

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・特殊学級の授業を、T・Tにより全職員が体験することで特殊学級在籍児童への理解をより図ることができた。
- ・通常の学級に在籍する特別な配慮を要する児童について、個別の指導計画を作ることができた。
- ・授業を見合うことにより、配慮のあり方についての検討を進めることができた。
- ・教室の学習環境を、児童にとって障害になる物はないかという観点から見直してみることができた。このことにより、これまでに気付くことの無かった掲示物の配置、大きさ、色使いなどについて工夫することができた。
- ・教育環境を安全面や使いやすさの観点から見直し、配慮を要する児童にも対応できるものに改善していこうとする契機となった。

(2) 課題

- ・個別の障害に応じた実態を把握し、適切な配慮・支援の仕方を開発していくための手立てを確立していくことが必要であるが、それぞれの児童によって配慮する面が異なるので難しい。
- ・教育環境の整備に必要な金銭的な問題をどのように解決していけばよいのか。
- ・交流学习のめあてを明確にし、担任間の共通理解を進めていくための手順をはっきりとさせていくこと。

「生き生きと自ら取り組む児童の育成」

—算数科の指導を通して、基礎学力の確実な定着を目指す—

川越市立古谷小学校

研究のポイント

- 学年間の系統性をおさえた基礎・基本の重視
- 少人数指導を通して、個に応じた指導の徹底
 コース別学習（習熟度別学習等）、T・T指導の研究
- 問題解決的な学習の定着
- 生き生きと学び合う児童の育成

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 算数の単元の系統性を教師が把握し基礎・基本を踏まえた授業を推進することで、算数の楽しさを体感し、算数の授業を心待ちにするような児童を育てる。
- ② 問題解決的な学習を身につけることで、主体的に生き生き取り組む児童を育てる。
- ③ 学習形態や指導方法を研究し個に応じた手立てを追求することで、児童の学びの質を高める。

(2) 研究主題設定の理由

① 児童の実態から

明るく素直な児童であるが、自分の考えをはっきり伝えたり、自分の考えをしっかりと持つことが苦手な児童が多い。人間地区学力調査では、人間地区の平均を下回る項目があり、基礎的な内容の理解が不十分な児童がやや多いと捉えられる。また、NRT学力検査でも、アンダーアチーバーが一割強から二割弱あり、指導方法の工夫により基礎的な内容の定着が課題である。

② 学校教育目標から

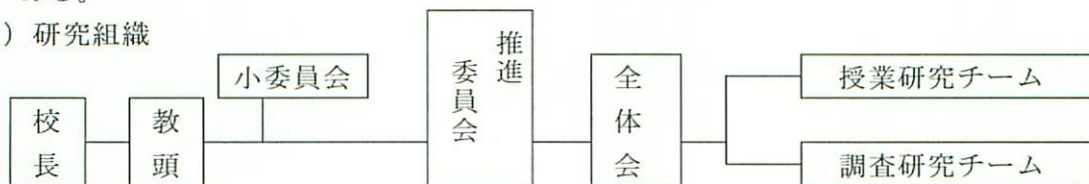
本校の学校教育目標「次代を担う心豊かな児童の育成」の達成のための重点の第一の柱に「基礎学力の定着と向上」があり、学校全体で取り組むべき課題である。

また、それを受けた各学年の教育目標や学級目標にも「考える子」の具現化として位置づけられている。

④ 今日的な課題から

学力低下の危惧が叫ばれ、保護者は我が子の学力の確実な定着を望むとともに、学校での教育の方針や指導法などに関心が高まっている。埼玉県で取り組んでいる「教育に関する3つの達成目標」への取組についても、「学力」は日々の授業に直結する課題である。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

①仮説1 系統性を明らかにすることにより、基礎学力の確実な定着が図れるであろう。

- ・教材研究で系統性を明らかにする
- ・基礎・基本の定着を図る
- ・单元ごとに基礎・基本を明らかにする

②仮説2 問題解決的な学習を充実させることにより、自ら取り組む児童が育つであろう。

- ・課題を明確にした授業の導入の工夫を図る
- ・解決の見通しを持たせる
- ・学習過程を身につけさせる
- ・算数のよさをわからせる



③仮説3 個に応じた支援・学習形態を工夫することにより、生き生きと学び合う児童が育つであろう。

- ・教え学び合う場を設定する
- ・補充・発展学習で一人一人の個性を伸ばす
- ・児童の自己評価の時間を設定する
- ・解けた喜びを味わわせる
- ・中学校との連携を図る（教材研究等）

(2) 研修計画

一 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・公開授業で、前年度までの研究で共通理解してきた指導方法の確認を行った。 ・研究の方針と進め方の全体研修会を重ねた。 ・各研究チームのめあてと活動を確認しあった。 ・授業研究会へ向けて、指導案の共通化を図る研修会を行った。 ・児童の実態調査と各学力調査の分析と指導の手立てを話し合った。
二 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・第3学年授業研究会を実施した。单元名『わり算を考えよう』 ・第1学年授業研究会を実施した。单元名『ひき算』 ・第4学年授業研究会を実施した。单元名『わり算の筆算を考えよう』 ・第5学年授業研究会を実施した。单元名『わり算』 ・算数科の指導についての講演会を開催した。
三 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・第6学年授業研究会を実施した。单元名『割合の表し方を考えよう』 ・第2学年授業研究会を実施した。单元名『1000より大きい数を調べよう』 ・来年度の研究へ向けて、算数科の講演会を開催した。 ・実態調査を基に、今年度の成果と来年度の課題をまとめる。

3 実践事例

4年生の授業「わり算の筆算(2)」実践について記す。

単元の目標

[関心・意欲・態度] 除数が2位数の除法計算の仕方をもとに進んで考えようとする。

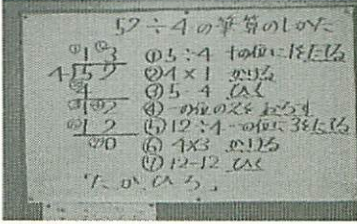
[数学的な考え方] 見積もりを基に、仮商のたて方や修正の仕方について考える。

[表現・処理] 除数が2位数の除法計算を正確に筆算できる。

[知識・理解] 除数が何十の除法計算の仕方を理解する。

除数が2位数の除法の計算の仕方を理解する。

指導計画

時	目標	学習活動	おもな評価規準	
2 けた の数 で わる	<ul style="list-style-type: none"> わり算の学習についての見通しを持つ。 何十でわる計算のしかたを理解し、その計算をすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法計算を振り返り、2桁の除法計算に意欲や関心を高める。 $60 \div 20$の計算のし方を考える。 	<p>関 わり算の学習の見通しを持ち、問題解決への意欲を持つことができる。</p> <p>考 10を単位として、何十でわる計算を考えている。</p> <p>表 何十でわる計算ができる。</p> <p>知 何十でわる計算の仕方を理解している。</p>	学級均等 少人数
2 けた の数 で わる 筆算 2	8	じっくり(補充)	ぱっちり(基本)・すいすい(発展)	学級 コ ー ス 別
	目標	<ul style="list-style-type: none"> 2位数\div2位数=1位数の計算ができる。 何十でわる計算の仕方を理解し、その計算をすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3位数\div2位数=1位数の計算の仮商のたて方を理解し、その計算ができる。 	
	学習内容	<ul style="list-style-type: none"> $52 \div 4$の筆算の仕方を理解する。 $90 \div 30$ 	<ul style="list-style-type: none"> $153 \div 24$の筆算の仕方を考える。 計算練習をする。 	
主な 評価 規準	<p>表 1位数\div1位数の筆算ができる。</p> <p>表 何十でわる計算ができる。</p> <p>知 何十でわる計算の仕方を理解している。</p>	 <p>表 3位数\div2位数の筆算ができる。</p>		
9 本 時	<ul style="list-style-type: none"> 商の見当のつけ方、修正の仕方を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 3位数\div2位数=2位数の計算の仮商のたて方を理解し、その計算ができる。 		
学	<ul style="list-style-type: none"> 2位数\div2位数=2位数の計算 	<ul style="list-style-type: none"> $345 \div 21$の筆算の仕方を考える。 		

	習内容	練習をする $47 \div 15$	・計算練習をする。
	主な評価規準	<input type="checkbox"/> 商の見当付けができ、仮商を修正しながら2位数でわる筆算ができる。 <input type="checkbox"/> 商の見当のつけ方、仮商を修正する仕方を理解している。	<input type="checkbox"/> 既習の計算を基に、筆算の仕方を考えている。

わり算のきまり	1 2	じっくりコース (補充)	ぱっちりコース (基本)	すいすいコース (発展)	学年コース ④
	目標	・3位数 \div 2位数=1位数の計算の仮商のたて方を理解し、その計算ができる。	・除法について成り立つ性質を理解する。	・除法について成り立つ性質を理解する。	
	学習内容	・153 \div 24の筆算のしかたを考える。 ・計算練習をする。	・商が等しいわり算の式を見比べて除法の性質について考える。	・商が等しいわり算の式を見比べて除法の性質について考える。	
	主な評価規準	<input type="checkbox"/> 3位数 \div 2位数の筆算ができる。	<input type="checkbox"/> 具体的な場面から、被除数、除数の関係を考えている。	<input type="checkbox"/> 具体的な場面から、被除数、除数の関係を考えている。	

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 授業研究会を全学年で実施し、全教員で授業について協議を深めることができたので研究仮説に対する各学年の方策や取組が明確になり、検証することができた。
- 授業研究に至るまでの教材研究が教師の力になった。
- 問題解決的な学習過程が定着してきたことで、児童の発表の力や自己表現力の向上につながった。

(2) 課題

- 単元の指導計画を細部まで作成し、日々の授業で活用しやすい環境作りをする。
- 今年度の検証を基礎に、来年度のねらいを明確にしていく。(意識調査・学力達成目標検証テストの結果・授業研究のまとめ等)
- 学習形態の工夫を更に発展させ、系統性をより一層明らかにするためにも中学校との連携を視野に入れて研究したい。

「未来を手にする、生きる力と自立心を身に付けた児童の育成」
～確かな学力を伸ばす学習指導法の工夫改善を中心に～

川越市立古谷東小学校

— 研 究 の ポ イ ン ト —

- 国語科・算数科を同時に研究し、共通の土台として問題解決学習（課題解決学習）を基本とした指導過程の工夫を通じた授業改善への取組
- 小規模校という本校の特徴である少人数を生かし、個に応じた支援のあり方についての取組
- 国語科、算数科を通して児童自身が学び方を身に付けると共に教師の指導力の向上を目指す取組

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 国語科・算数科の研究を通して教師の指導力の向上を図る。
- ② 児童の実態を把握し、一人一人の理解を深め、個に応じた支援のあり方を工夫し、確かな学力を身に付けさせる。
- ③ 学ぶ楽しさや達成感を味わわせることで、主体的に学習に取り組む児童の育成を図る。

(2) 研究主題設定の理由

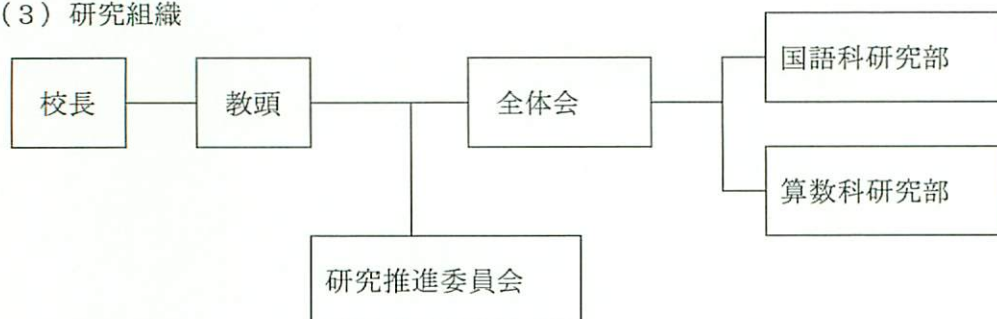
本校では、年々児童数減少の傾向にあり、全学年1学級の小規模校である。このような実態から、次のようなよい点や課題があげられる。

- 少人数であるためにいろいろな面で指導が徹底する。
- 児童数が少ないことから一人一人の声かけや細かい指導がより多く可能である。
- 一人一人の活動場面が多く意欲的に活動する児童が多い。
- 教師が手をかけすぎて依頼心が強い。
- 人数が少ないため、競争意識が乏しく、切磋琢磨する機会が少ない。
- クラス替えがないことから人間関係が狭くなりがちである。

以上のことから本校の学校教育目標「意欲あふれ心豊かな子どもの育成」を踏まえ研究テーマ「未来を手にする、生きる力と自立心を身に付けた児童の育成」副題を「確かな学力を伸ばす学習指導法の工夫改善を中心に」として、本研究に取り組むこととした。

さらに、読む、書く、計算は、「教育に関する3つの達成目標」との関わりからもいえるように学習の基礎であり、国語科（「読むこと」を中心に）・算数科を同時に研究することにより教科を超えて広がりを持った研究をしていきたいと考えている。

(3) 研究組織



2 研究の内容

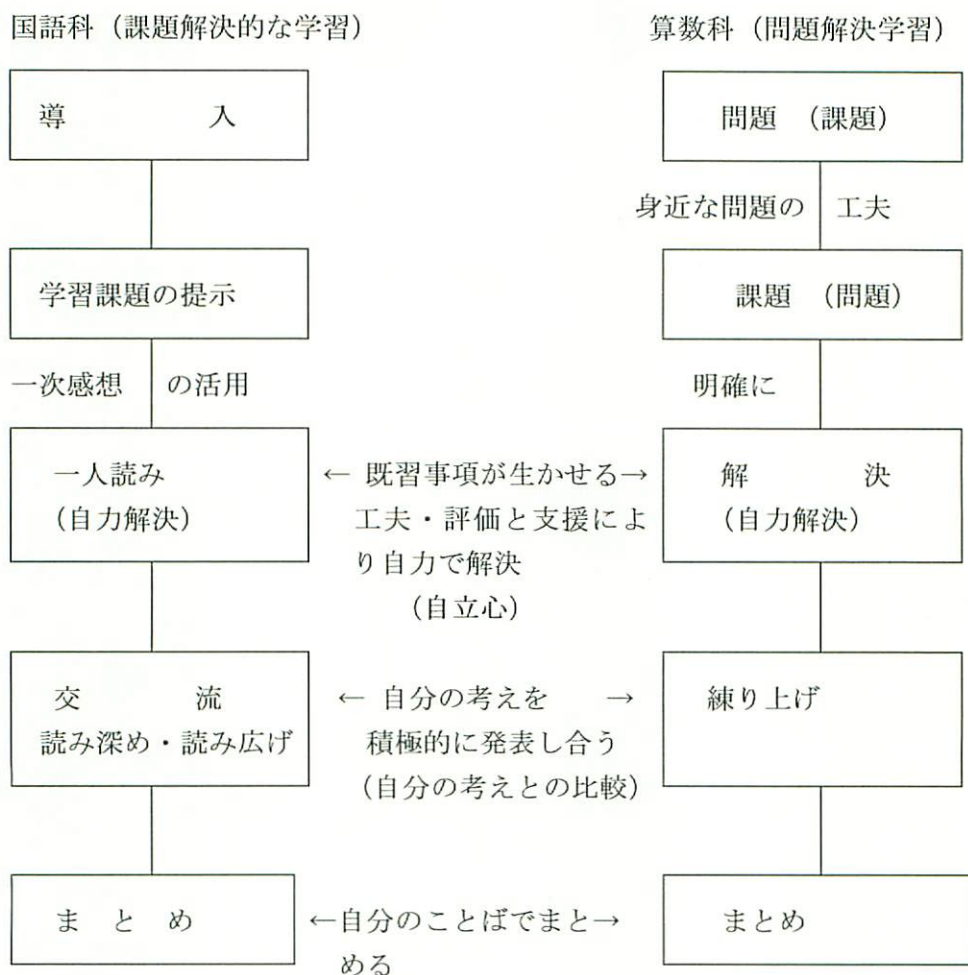
本年度の研修計画と実践（授業研究会等）

1 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 6月27日（月） 国語科授業研究会6年 単元名「森へ」 ・ 7月 6日（水） 講話「国語科における教材研究の実際」 ・ 7月21日（木） 講話「算数科における教材研究の実際について」 ・ 7月25日（月） 講話「学校研究の進め方」 ・ 8月24日（水） 講話「国語科授業改善の方向性について」
2 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10月13日（木） 国語科授業研究会2年 単元名「サンゴの海の生き物たち」 ・ 12月 1日（木） 算数科授業研究会1年 単元名「ひきざん」
3 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1月19日（木） 国語科授業研究会3年 単元名「モチモチの木」 ・ 1月24日（火） 算数科授業研究会5年 単元名「比べ方を考えよう」 ・ 2月 6日（月） 算数科授業研究会4年 単元名「計算のきまり」

3 実践例

(1) 学習過程を明確にした授業実践

国語科では、「読むこと」の学習を中心に課題解決的な学習、算数科では、問題解決学習である。この学習過程を基本として授業展開することで、児童の学び方の定着を図ると共に教師の指導力の向上を目指した。



以上のような学習過程をもとに授業研究会では、「課題提示の仕方・自力解決の場面での支援・話し合いの深め方（交流・練り上げ）」について授業の視点として取り上げ研究協議の柱として話し合いを深めた。



自力解決の場面
 机間指導に目的を持たせよう。
 ① 個別支援・指導
 ② 評価記録
 ③ 誰が何を書いたか記録し次の活動へのつながりを
 ↓授業の組み立て
 意図的指名で
 話し合いを焦点化する。

(2) 各研究部の取組

① 国語研究部

- ・音読カードの作成
- ・声のものさし作成掲示
- ・スキルタイムの問題作成
- ・学習がふりかえられるノートの工夫
- ・初発の感想の活用（毎時感想を生かした導入の工夫）
- ・指導過程の工夫（つかむー自力で読むー交流し読み深めるーまとめる）
- ・板書の工夫（理解を深める計画的な板書・ビジュアルに）
- ・全体で他学年の教材研究（教材研究に慣れ親しむ）
- ・授業改善のための手引き作成（研究授業後発行）
- ・言葉への関心を高める工夫
- ・評価の工夫

② 算数研究部

- ・指導案の形式の作成
- ・コース別学習の教室づくり
- ・スキルタイムの問題作成
- ・算数教材室の整備
- ・算数コーナー設置（問題解決学習の流れに沿って学習の足跡を示したもの）
- ・コース別学習の名称の工夫（百分率博士・数直線、説明・チャレンジコース）
- ・個に応じた指導の工夫（発表カード・ヒントカードの作成）
- ・模擬授業の実施（授業の流れの確認）
- ・全学年による一貫したノート指導（日付を書く・学習過程を書く・課題は、赤で囲む・問題は、黄色で囲む・まとめは、青で囲む）

4 研究の成果と課題

(1) 成 果

- ・全員が授業研究に取り組み、国語科・算数科の指導の流れを把握することができた。
- ・授業研究会を重ねるにつれ課題が明らかになり、授業への取組に工夫が見られ指導力の向上につながった。
- ・国語科では、初発の第一次感想を生かすことが定着し、児童一人一人を大切にしながら授業を展開することにより児童理解を深めることができた。また、児童相互の理解も深めることができた。
- ・算数科では、指導過程が定着し自力解決の時間が十分確保できるようになった。
- ・算数科では、単元によりコース別学習・TT指導等効果的に学習形態を選択し成果を上げることができた。

(2) 課 題

- ・研究テーマの分析をし、古谷東小ならではの研究をさらに進めていきたい。
- ・国語科・算数科を同時に研究することの良さをさらに深めていきたい。
- ・国語科・算数科共に評価規準を明確にし、「努力を要する児童」への支援計画をたて効果的な支援がきるようにしたい。
- ・中学校との連携も考えていきたい。

『わかる喜び』『できる喜び』を味わわせる学習指導法の工夫改善

川越市立高階小学校

研究のポイント

- 学び方の定着を目指し、「わかる喜び」「できる喜び」を味わわせる。
 - ・教育活動全般、特に算数科における学び方の指導とその定着を図る。
 - ・基礎・基本の学習内容を明確にし、確かな学力の定着を図る。
 - ・課題に対して自らの考えを追求していく問題解決的な学習を支援する。
(問題解決が生きる板書の工夫・学習の筋道がわかるノート指導等を通して)
- 個に応じた指導に向けての指導方法・指導形態(少人数指導、TT指導)の工夫をする。
- 指導と評価の一体化を図り、一人一人の子どものよさを認め、励まし、共に伸びる姿勢(あいあいの哲理…感じあい、認めあい、なごみあい、教えあい、育ちあい)を育成する。

1 研究の概要

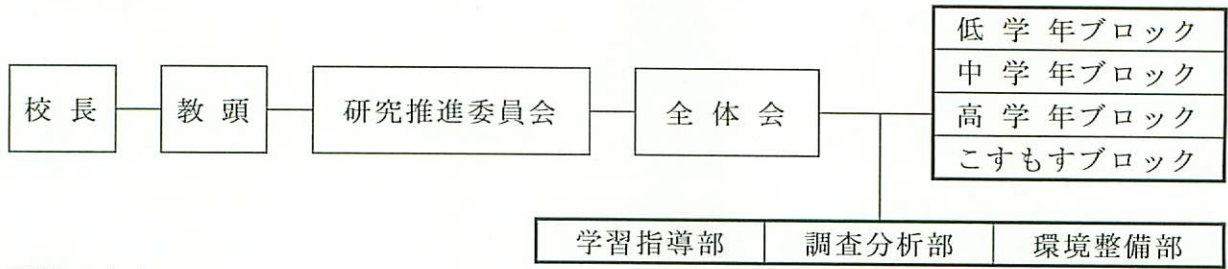
(1) 研究のねらい

- ① 学び方の定着を図る
 - ・教育活動全般における学び方を身に付けさせる。
 - ・基礎・基本の学習内容を明確にし確実な学力の土台を築く。
 - ・問題解決を通して、基本的な学び方(学習過程)を身に付けさせる。
- ② 個に応じた指導や支援・評価の一体化を図る
 - ・少人数指導、TTによる指導、一斉指導を効果的に組み合わせる。
 - ・一人一人に応じたきめ細かな指導の工夫をする。
- ③ 自力解決や仲間と学び合う場面でのよさを認め励ます指導を推進する
 - ・相互学習のよさを生かした指導と評価の工夫をする。
 - ・効果的な言葉かけによりよさを認め励ます指導を行う。

(2) 研究主題設定の理由

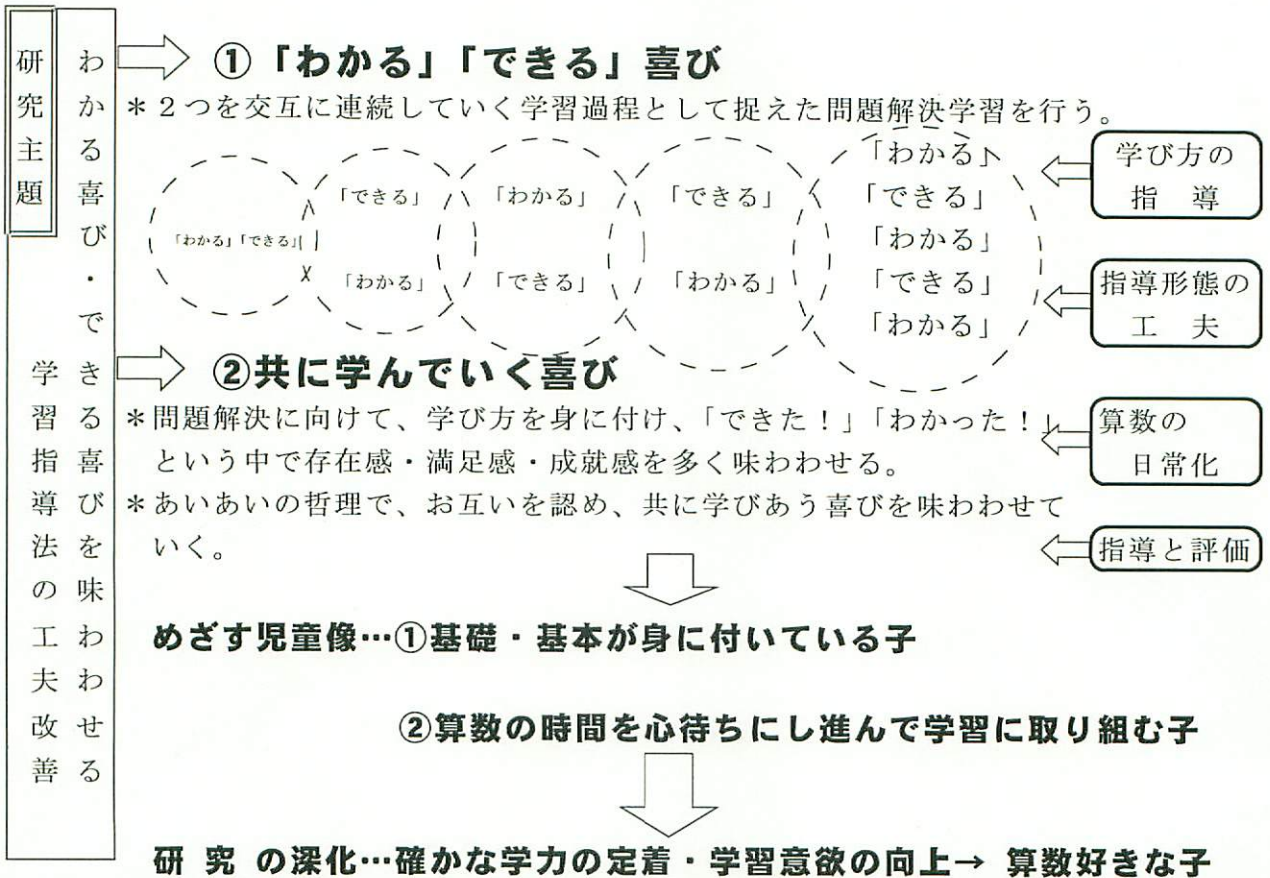
- ① 算数科を通して、
「生きる力」をはぐくむことをめざした学習指導要領の主旨を受け、算数科の目標は、「筋道を立てて考える能力」「進んで生活に生かそうとする態度」をあげている。
- ② 児童の実態は、
本校の児童は、概ね基礎学力は身に付いているが、思考・判断する力が不十分である。また、個人差が大きく学び方が身に付いていない。具体的な学習場面では、問題を深く考えるというより答えを求めることだけに専念しがちであり、答えが出てもなぜそうなるのかわからなかったり、一つの解き方で満足し他の解き方を見つけようとしなかったりする面が見られる。
- ③ 基礎・基本を重視し自ら学び自ら考える力の育成を図る
そこで基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむことをねらいとし算数科学校研究に取り組む。研究主題を、「『わかる喜び』『できる喜び』を味わわせる学習指導法の工夫改善」と設定し、問題解決的な学習を積極的に推進していく。その学習過程で、一人一人の子どものよさを認め伸ばすことや共に学び合うことのよさを大切にしていく。

(3) 研究組織



2 研究の内容

① 研究構想



学級経営

② 研究の主な手立て

○学び方の指導	・教育活動全般の「規律ある態度」から、算数科で取り組む姿勢・態度 ・「たかしな」解決ナビによる問題解決学習の仕方
○指導形態の工夫	・一斉指導、TTによる指導、少人数指導 ・コース別学習の設定
○算数の日常化	・水曜朝の「わくわく算数タイム」の実施 ・算数コーナーと見て触れて学ぶ体験学習コーナーの設置
○指導の評価の一体化	・目標に準拠した評価の工夫 ・指導に生かす評価の充実（子どもをその気にさせる言葉かけ）

3 実践事例 第4学年「わり算の筆算」(除数が2けたのわり算)

本単元での指導の重点

- ① T T指導(単元前半)や習熟度別コース(単元後半)における個に応じた指導
- ② 既習事項を生かして考えを発展させて問題を解決できるような指導の工夫
- ③ 問題解決型の学習における合理的な方法を気付かせるための指導

学習段階における個に応じた支援の計画(3/17時間)

	T 1	T 2
つかむ	全体指導	T1 補助+個への関わり(板書・丸付け)
予想する	全体指導	個への支援(特に低位の子へ見通しを立てるために昨日の学習を思い出させる)
考える	① 半分の児童の考えの道筋を把握⇒T2 と照らし合わせる(児童の考えの道筋の共通理解) ② 個別に支援 ③ 発表者の選定	① 半分の児童の考えの道筋を把握⇒T1 と照らし合わせる(児童の考えの道筋の共通理解) ② ヒントコーナー 何十で見積もる方法を支援(90÷20として考える) ③ ヒントコーナーに児童がいなくなった場合、個別に支援
話し合う	全体指導	必要に応じて個への支援(低位の子へ、視点を示したり共通点を確認したりする)
まとめる	全体指導	T1 補助+個への関わり(板書・丸付け)

学習の様子

問題

色紙が87まいあります。この色紙を1人に21まいずつ分けると、何人に分けられて、何まいあまりありますか。

昨日までの学習との違いを確認して、課題を立て、やり方を予想します。

課題

87÷21 の計算のしかたを考えよう。

予想

引き算 かけ算 わり算

考える

- 自力解決の手立て
- ◎既習事項を使う
- ◎算数コーナーやノートを参考にする
- ◎ヒントカードを見に行く
- ◎ヒントコーナーへ行く



前にやったたし算や引き算が今回も使えそう。

わり算のやり方のヒントが欲しい。ヒントコーナーへヒントを聞きに行くよ。

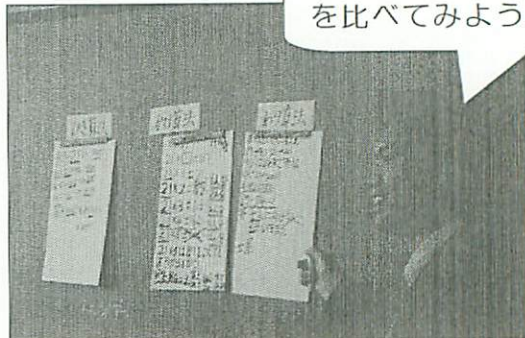


話し合う



発表（3通りの方法）
練り上げ（比較検討）

それぞれの方法
を比べてみよう。



まとめる

今日わかったこと
は…です！



【連続した小単元を2年間に
わたって研究した成果】

- あらかじめ子どものつまずきのポイントがわかっていたため以下の点を学年全体が事前に理解し、指導に当たった。
 - ・ わり算の筆算へつながる考えを取り上げ、それらを比較検討することで、筆算の簡便性を子どもたちに伝えることができた。
 - ・ 積み上げ方式で筆算を行っていた者も、自然な流れで商の見積もりを立てての計算へ移行することができた。
 - ・ 必要に応じて補助的な計算を行う習慣をつけさせ、間違いを減らすことができた。
 - ・ 計算の仕方と筆算の仕方を60分間授業で行うと効果が高まると思われるので、今後検討していきたい。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 問題解決型の学習の流れが定着したことで、児童が学び方を身につけることができた。
- ・ ノートの書き方、発表の仕方など学び方を身に付けさせることで、学習がスムーズにできるとともに、指導の一貫性によって学年が上がっても学び方を新たに指導することが少なくなった。
- ・ TT指導、少人数指導などを指導計画に位置付け、より子どもに寄り添った指導をすることができた。
- ・ 「算数コーナー」を充実することで、子どもに思考のヒントを与えるとともに意欲を喚起することができた。

(2) 課題

- ・ 意欲的に学習に臨む子どもを育成するための具体的な方策をさらに増やしていく必要がある。
- ・ 問題解決場面における教師の支援を体系化する必要がある。
- ・ 数学的な考え方を伸ばす指導を共通化し、共有化していく。
- ・ 研究を通して一体となった職員の指導力を高め、子どもたちの学力をさらに伸ばしていく。